

熊野町平成30年7月

豪雨被災誌

あの日、あの時、熊野で見たもの。



熊野町平成30年7月

豪雨被災誌

あの日、あの時、熊野で「見+た」もの。

ごあいさし



熊野町長

みむら ひろし
三村 裕史

「
自助・共助・公助の
理念のもと、安全な
まちづくりに向けて
」



熊野町議会議長

おおせど こうき
大瀬戸 宏樹

「
体験と教訓を風化
させることなく後世に
継承し災害へ備える
」

平成30年7月豪雨により、町内で12名の尊い命が犠牲となりました。改めて、お亡くなりになられた方々に衷心より哀悼の意を表しますとともに、被災された多くの皆様に心からお見舞い申し上げます。

また、災害直後から、自衛隊、警察、消防をはじめ、国や県、他の自治体などの関係機関、地域の皆様など、多くのご協力を頂きましたことに心から感謝申し上げます。

本町では、この豪雨により、町内各地で土石流や崖崩れ、河川の氾濫が発生し、住宅や道路、農地などに多大な被害が発生するとともに、広島市、呉市、東広島市など周辺市町につながる道路が一時的に全て通行止めとなるなど、2か月以上にわたって日常生活への影響が生じました。

近年、経験したことのない大きな災害を受け、町は、災害時の初動対応などを検証する「平成30年7月豪雨」災害検証委員会を設置し、今後の防災・減災に向けての取り組みについての提言をいただくとともに、災害からの一日も早い復旧・復興に向けて、災害復興計画を策定して全力で取り組んでいます。

主な防災・減災関係の取り組みとして、多種多様な方法での住民への確実な避難情報の伝達体制の整備、早めの避難を促す自主防災組織の設立、育成支援や避難所での様々な課題の解決に取り組むための「防災拠点施設整備構想」に基づく拠点施設の整備などを進めているところです。

この被災誌は、町の災害の歴史や平成30年7月豪雨の被害状況、体験談など、これまでの町民や各関係者の取り組みを記録に残し、この未曾有の災害の経験から得られた教訓を、地域や世代を超えて後世に伝えるために編集いたしました。町民、事業者、関係機関及び町が防災・減災に対するより高い意識を持ち、町全体が協働して災害に強いまちづくりを実現するために、役立てて頂ければ幸いです。

町では今後も、復興計画に基づく事業を推進するとともに、大切な命を守るために、自らの命は自ら守る「自助」、地域で共に支え合う「共助」、町が住民等を守る「公助」の理念のもと、防災・減災を推進し、安心・安全なまちづくりに向けて取り組んでまいります。

結びに、本誌の作成にあたり、取材やアンケート調査、資料の提供にご協力くださいました多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成30年7月豪雨による被害は、7月3日から6日にかけて、大量の雨が降ったことによるものでした。本町では、近年、大きな災害も発生していなかったことから、安全な町であるとの認識が当時、町内にあったと感じています。しかし、この豪雨では町内各地で土石流や崖崩れ、河川の氾濫が発生し、土石流によって12名の尊い命が犠牲となりました。

改めて、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された住民の皆様々に心からお見舞い申し上げます。

また、災害直後から、町職員はもとより、速やかに対応頂きました国、県、自衛隊、警察、消防、他の自治体、各種団体の皆様、そして、ボランティア活動や義援金など、全国各地からのあたたかいご支援に心から感謝申し上げます。

さて、この過去に経験したことのない災害は、わたしたちの災害に対する備えの必要性を考えさせられるきっかけとなりました。熊野町議会では、災害後速やかに熊野町議会災害対策特別委員会を設置し、全8回の調査活動を実施して、自然災害発生時における議員間での被災状況等の情報の共有や住民の安全・安心の確保のためのさまざまな事項を確認し、町執行部への要望も行いました。

その取り組みの1つとして、大規模な災害が発生した時の町議会及び町議会議員の対応を定めた「熊野町議会における災害発生時の対応要領」を策定しました。

また、平成30年7月豪雨による体験と教訓を風化させることなく後世に継承し、更に、住民一人ひとりが防災意識を高めるとともに、自助、共助及び公助の精神によるさまざまな災害への備えを充実・強化することが必要であることから議員提案により、7月6日を「熊野町防災の日」として定める条例を制定しました。

加えて、引き続き、防災・減災について町執行部と連携を取りながら、短期的には、早期避難誘導を可能とするように努め、中期的には、自主防災活動のリーダーの育成や住民への情報周知の徹底などを、長期的には、100年先を見据えた自然災害死「0」のまちづくりに取り組むことを強く要望しております。

あれから2年が経ちましたが、本誌の発刊にあたり、今一度この災害を心に刻み、全ての住民が安心して暮らせる町となるよう、住民の皆様とともに議会も一丸となって防災・減災に取り組んでまいりたいと思っております。

熊野町平成30年7月

豪雨被災誌

あの日、あの時、熊野で見たもの。

目次

Contents

第1部 町の災害の歴史 5

熊野町で起きた主な災害 6

第2部 平成30年7月豪雨の被災状況 7

平成30年7月豪雨における町内の被害状況 8

- 1 豪雨の概要 8
- 2 被害の概要 9
- 3 災害対応の状況 12
- 4 職員体制 15

熊野町内の被害状況 16

- 航空写真 16
- 新宮地区 18
- 初神地区 20
- 萩原地区 23
- 城之堀地区 24
- 出来庭地区 26
- 中溝地区 27
- 呉地地区 28
- 川角地区 30
- 平谷地区 34
- 矢野峠(広島市安芸区) 35
- 避難所 36

町民からの写真提供 38

第3部 語られる体験談 43

町関係者 44

- 前・副町長 内田 充さん 44
- 総務部長 宗條 勲さん 45
- 住民生活部長 貞永 治夫さん 46
- 社会福祉協議会ボランティアセンター 47
- 地域支え合いセンター 48

三重県応援職員 50

- いなべ市防災課 大月 浩靖さん 50
- 伊勢市危機管理課 藤原 宏之さん 51

熊野町消防団第八分団 52

川角自治会 54

- 川角自治会長 藤田 孝明さん 54
- 川角自治会副会長 城後 伸行さん 55
- 前・川角自治会防災会代表 田中 久也さん 56

大原ハイツ復興の会 57

- 大原ハイツ復興の会代表 小川 直明さん 57

遺族 58

- 桐岡 幸恵さん 58

自衛隊 59

- 陸上自衛隊 第46普通科連隊 59

検証委員会 60

- 「平成30年7月豪雨」災害検証委員会委員長 土田 孝さん 60

第4部 復旧の状況と町の将来 61

第6次熊野町総合計画 62

熊野町都市計画マスタープラン 65

熊野町地域防災計画 65

熊野町災害復興計画 66

3組の復興支援活動 70

- イラストレーター むかいあぐるさん 71
- フリーアナウンサー 徳永 真紀さん 72
- シンガー Mebius(岡田 真実さん/岡田 賀江さん) 73

平成30年7月豪雨災害からの復旧状況 74

- 災害復旧中箇所(令和3年2月時点) 74
- 災害復旧完了箇所(令和2年11月時点) 76

未来へのメッセージ 78

第1部



町の災害の歴史

本町における過去の災害は、地形的、気象的条件及び周囲の特性を考慮すると、最も発生頻度の高い災害として台風による暴風雨、梅雨期の集中豪雨による河川の氾濫、がけ崩れ、土石流等が挙げられます。

西暦	和暦	記事
1821	文政4年	川角村大洪水、郡役所が検分
1828	文政11年	川角村洪水、田地および土手を修理
1829～1832	文政12～天保9年	川角村洪水
1838	天保9年	5月15日から約1か月長雨が続き、洪水で被害甚大
1839	天保10年	川角村大洪水
1846	弘化3年	川角村一帯洪水で損害大
1848	嘉永元年	熊野村洪水で損害が大
1852	嘉永5年	夏秋洪水が起り、三度大風、新宮大川筋出来庭小川筋所々切損
1907	明治40年7月15日	猛雨大洪水初神、新宮の被害大
1919	大正8年	熊野川の堤防が決壊し大きな被害が発生
1945	昭和20年9月	枕崎台風/町内各地に土石流(崩壊地)
1953	昭和28年6月	呉地大池決壊/呉地ダムのところにあった土堰堤が壊れた。家も2軒流され、2名の死者を出した。
1965	昭和40年9月	熊野川(深原・大坪)流失
1999	平成11年6月29日	二河川の氾濫田畑の冠水、熊野町民グラウンドと冒険公園に土砂が流入
2001	平成13年3月24日	芸予地震/震度6弱 熊野町自主避難2世帯5名
2009	平成21年7月20～22日	長雨により町内各地でがけ崩れ
2018	平成30年7月5～7日	平成30年7月豪雨

明治40年 大水害

明治40年7月15日の大水害について芸備日々新聞の記事では、熊野村7月16日調べとして、死傷者6名となっています。全容が判明するのは、かなり日数を要したと思えます。椎川が氾濫して多数の人が亡くなったと伝えられている。(椎川は、筆の里工房駐車場西側に位置しています)熊野でも予想以上の被害で職員も少なく調査が遅れたのかもしれません。



「ふるさと熊野探訪」より(熊野町郷土史研究会)



昭和20年9月 枕崎台風

枕崎台風が上陸し、石嶽山が各所で崩れ、河川の堤防が各所で決壊し、大きな被害をもたらした。このとき、新宮区で5名の青少年が埋没死した。

終戦と枕崎台風による大水害

< 藤河祥司 >

- ・家の裏山が崩れ土石流となって家に流れ込んできた。
- ・県道もあちこち土石や流木が横たわり惨めな様。
- ・二軒の家共山崩れの為全壊。
- ・水害のために橋は全て流された。
- ・熊野中の河川の氾濫による被害は甚大。
- ・新宮区では、あちこちの土手は流され一面河原になって、田という田はほとんど水に浸かっていた。

< 中須岩登 >

土砂崩れが発生。「道上奥の治水池」と「さんど池」の2つの池の土手が切れて被害が大きくなった。

< 友岡文夫 >

深原地区は、人的被害はなく、家屋が三軒流失し、橋も流失。

「ふるさと熊野探訪」より(熊野町郷土史研究会)

平成11年6月 三石山土石崩れ

三石山土石流は町民グラウンド側で発生、人的被害はありませんでした。



第2部



平成30年7月豪雨の 被災状況

1. 豪雨の概要

平成30年7月、前線や台風7号の影響により、日本付近に暖かく湿った空気が供給され続け、西日本を中心に広い範囲で記録的な大雨となりました。

本町での雨の降り始めは、7月3日でした。5日の9時から10時、14時から16時、17時から18時までの間は、時間あたり10mmから15mmのやや強い雨が降りましたが、その他の時間帯は、数ミリ程度の雨量でした。

6日に入り、14時から17時までは、時間あたり10mm以上のやや強い雨となり、17時から20時にかけて時間あたり20mm、44mm、54mmと急激に雨量が増加していきました。

降り始めからの連続雨量は473mmに達し、7月の平均雨量の2倍を記録しました。熊野川の氾濫をはじめとする浸水被害と、大原ハイツをはじめとする土砂災害が各所で発生し、町内に未曾有の被害をもたらしました。

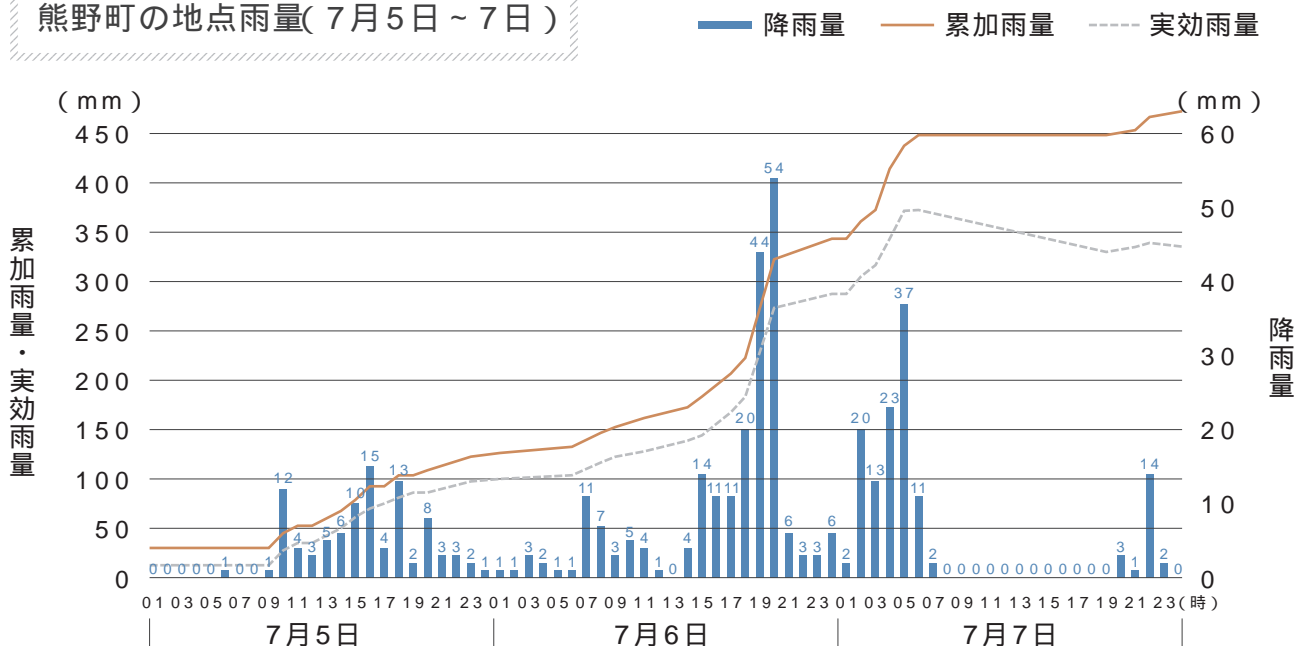
降雨状況等

日付	時間	状況
7月3日	7:20	雨の降り始め
7月6日	5:40	大雨警報(土砂災害)発表
	15:40	実効雨量150mm超(発表は15:50)
	18:10	土砂災害警戒情報発表
	18:36	洪水警報発表
	19:00	実効雨量223mm
	19:40	大雨特別警報(土砂災害・浸水害)発表
7月9日	16:00	連続雨量473mm(降り始めからの雨量) 7月平均降水量227.7mm(呉観測点)

雨量

	雨量	時間
総雨量	473mm	7月3日午前7時20分～ 7月9日午後4時までの間
24時間 最大降雨量	330mm	7月6日午前5時50分～ 7月7日午後5時40分までの間
1時間 最大降雨量	66mm	7月6日午後6時50分～ 7月6日午後7時50分までの間

熊野町の地点雨量(7月5日～7日)



(資料：熊野町資料)

2. 被害の概要

(1) 人的被害

死者は12人に及びました。全員が川角五丁目の大原ハイツ南側の三石山山頂付近から発生した土石流によるもので、その他に10人が重傷を負っています。

人的被害(令和元年7月1日現在)

	人的被害	備考
死者数	12人	川角五丁目「大原ハイツ」の土石流による
安否不明者	0人	
重傷者	10人	足切断、骨盤骨折、肋骨骨折等町外(県道矢野安浦線：矢野峠)での負傷者3名含む

(資料：熊野町資料)

7月7日から16日まで10日間続いた大原ハイツでの捜索活動



(資料：「平成30年7月豪雨災害の検証結果報告書」)

(2) 建物の被害

全壊が27棟あり、大規模半壊や半壊などを含め、163棟が被害を受けました。

被害棟数(令和元年7月1日現在)

	熊野町		
	大原ハイツ	その他	
全壊	27棟	17棟	10棟
大規模半壊	9棟	4棟	5棟
半壊	13棟	2棟	11棟
床上浸水	35棟	0棟	35棟
床下浸水	49棟	0棟	49棟
一部損壊	30棟	15棟	15棟
計	163棟	38棟	125棟

(資料：「熊野町災害復興計画」)



大原ハイツの土石流現場



県道の陥没箇所(新宮地区)



三谷川の決壊箇所(初神地区)

(3) 各種インフラ・公共施設の被害

道路の被害により周辺幹線道路網が寸断され、車両が町内に集中したため、今までに経験したことのない慢性的な渋滞が発生し、災害支援や物流に支障をきたしました。

また、本町の観光資源である筆の里工房も、土石流により駐車場に土砂・流木が堆積し、1週間休館を余儀なくされました。

インフラ被害の状況 (平成31年3月1日現在)

被害箇所	箇所数	備考
道路	69箇所	法面崩壊、舗装破損など
河川	35箇所	護岸崩壊、決壊、越水など
農林業施設	74箇所	土砂の流入、損壊など
上下水道	8箇所	送配水管、給水管破損、圧送管

(資料：熊野町資料)

ライフラインの 被害状況

区分	被害状況
電気	大原ハイツ113戸停電(8月9日復旧)
	他地区の状況9地区2,005世帯(7月12日までには復旧)
電話	大原ハイツ113戸断線(8月中旬以降復旧)
水道	大原ハイツ113戸使用不可(8月9日復旧)
路線バス	広島電鉄 広島～熊野線(矢野峠経由)不通(8月31日運行再開) 広島～熊野線(広島熊野道路経由)、熊野営業所～矢野駅線、 熊野営業所～阿戸線が渋滞により遅延 芸陽バス 阿戸線(瀬野駅～海上側)不通(9月10日運行再開)
広島熊野道路	7月6日20時から通行止め(7日11時通行止め解除)
	7月10日～9月8日まで無料開放
	7月12日～9月8日まで原付通行可の特例措置

(資料：熊野町資料)

(4) 農林業施設の被害

ため池、水路、農道、林道等の74箇所で被害があり、農業や日常生活に支障をきたしました。

農林業施設の被害

区分	被害内容
ため池	呉地大池、狐池、飛子上池等10箇所(土砂堆積)
水路	土砂堆積、水路決壊等3箇所
農地	土砂堆積等53箇所
林道	串掛、ハグイ原、千ヶ峠林道等5箇所
その他	頭首工、揚水機等3箇所
合計	74箇所

(資料：熊野町資料)

平成30年7月豪雨における町内の被害状況

被害の状況



3. 災害対応の状況

(1) 避難情報等の伝達状況

本町では7月6日5時40分の大雨警報の発表後、9時30分に自主避難所3箇所を開設し、同時に防災行政無線で周知しました。その後、18時10分に土砂災害警戒情報、同36分に洪水警報、19時40分到大雨特別警報(土砂災害、浸水害)が発表されました。

避難情報としては、17時に避難準備・高齢者等避難開始、19時に避難勧告、19時40分に避難指示を発令しました。これらも、防災行政無線や緊急速報メール等で周知しましたが、避難指示の発令時には、緊急速報メールの送信に遅れが生じました。

警報発令・情報伝達・避難所開設の経緯

洪水警報
 洪水注意報
 大雨特別警報
 大雨注意報

日時	警報	避難情報	避難所	防災行政無線	備考
7月5日					
0:00					
9:00					降り始め
12:00	38 大雨注意報発表				
16:00					降雨第1ピーク15mm
7月6日					
0:00					
5:00	40 大雨(土砂災害)警報発表				
7:00					降雨第2ピーク11mm
8:00					45 第1回大雨災害対策準備会議
9:00			30 自主避難所開設(町民会館、くまの・みらい、東部地域)	30 自主避難呼びかけ放送	
10:00	06 洪水注意報発表				00 第2回大雨災害対策準備会議
13:00					00 第3回大雨災害対策準備会議
16:00					
17:00		00 避難準備・高齢者等避難開始発令	00 自主避難所を避難所に移行	00 避難準備・高齢者等避難開始発令放送 55 避難準備(再放送)	
18:00	10 土砂災害警戒情報発表 36 洪水警報発表				30 災害対策本部設置
19:00		00 避難勧告発令	00 避難所増設(町民体育館、第三小、西部地域、熊中、ふれあい館、第一小、第四小)	02 避難勧告発令放送	
19:00		40 大雨(土砂災害、浸水害)特別警報発表		20 串掛林道通行止め 55 避難指示発令放送	
20:00					降雨最大ピーク54mm 大原ハイツ発災推定
21:00				00 農道熊野北線通行止め 25 避難指示(再放送)	
7月7日					
0:00					降雨第4ピーク37mm
5:00					00 第4回災害対策本部会議
7:00					
10:00	50 特別警報から大雨警報に				
15:00	35 洪水警報解除				
22:00	59 洪水注意報発表				降雨第5ピーク14mm
7月8日					
0:00					
1:00			避難所閉鎖(第三小、西部地域、第四小、熊中、ふれあい館、第一小)		
9:00	23 洪水注意報解除				
19:00					30 第5回災害対策本部会議
7月9日					
0:00					
4:00	23 大雨注意報発表				
10:00	06 大雨注意報解除				
7月11日					
9:00					
10:00		00 避難指示区域の一部解除			00 第8回災害対策本部会議
8月12日		00 大原ハイツブルーゾーン避難指示解除			
10月10日		00 避難指示区域全部解除 大原ハイツレッドゾーン避難指示解除			

(資料：熊野町資料)

(2) 避難所・避難者数

7月6日9時30分に自主避難所3箇所(町民会館、くまの・みらい交流館、東部地域健康センター)を開設しました。17時には避難準備・高齢者等避難開始を発令し、自主避難所を避難所に移行しました。避難勧告が発令された7月6日19時には7箇所の避難所(第一小学校体育館、第三小学校体育館、第四小学校体育館、熊野中学校体育館、町民体育館、中央ふれあい館、西部地域健康センター)を開設し、合計10箇所となりました。

避難勧告が発令された19時頃から22時頃にかけて避難所への入所が増え続け、翌日5時30分頃には入所者数1,053人に達しました。

被災直後は、避難所にペット同伴で避難した世帯と、他の世帯とが混在し、アレルギーや糞尿等への苦情が出たため部屋を分離して対応しました。また、町民体育館には空調設備が整備されておらず、避難者の身体的負担が大きくなったため、7月12日に国のプッシュ型支援によりエアコンを設置しました。

避難所は7月8日に4箇所に縮小され、9月6日に全避難所を閉鎖しました。



大原ハイツについて

大原ハイツには、本町の主要(幹線)道路までの接続道路が1本しかなく、7月6日20時頃に発生した第一波の土石流の土砂がその道路に流れ込んだため、住民が避難できなくなりました。その後、住宅にまで及ぶ大規模な第二波の土石流が発生しました。

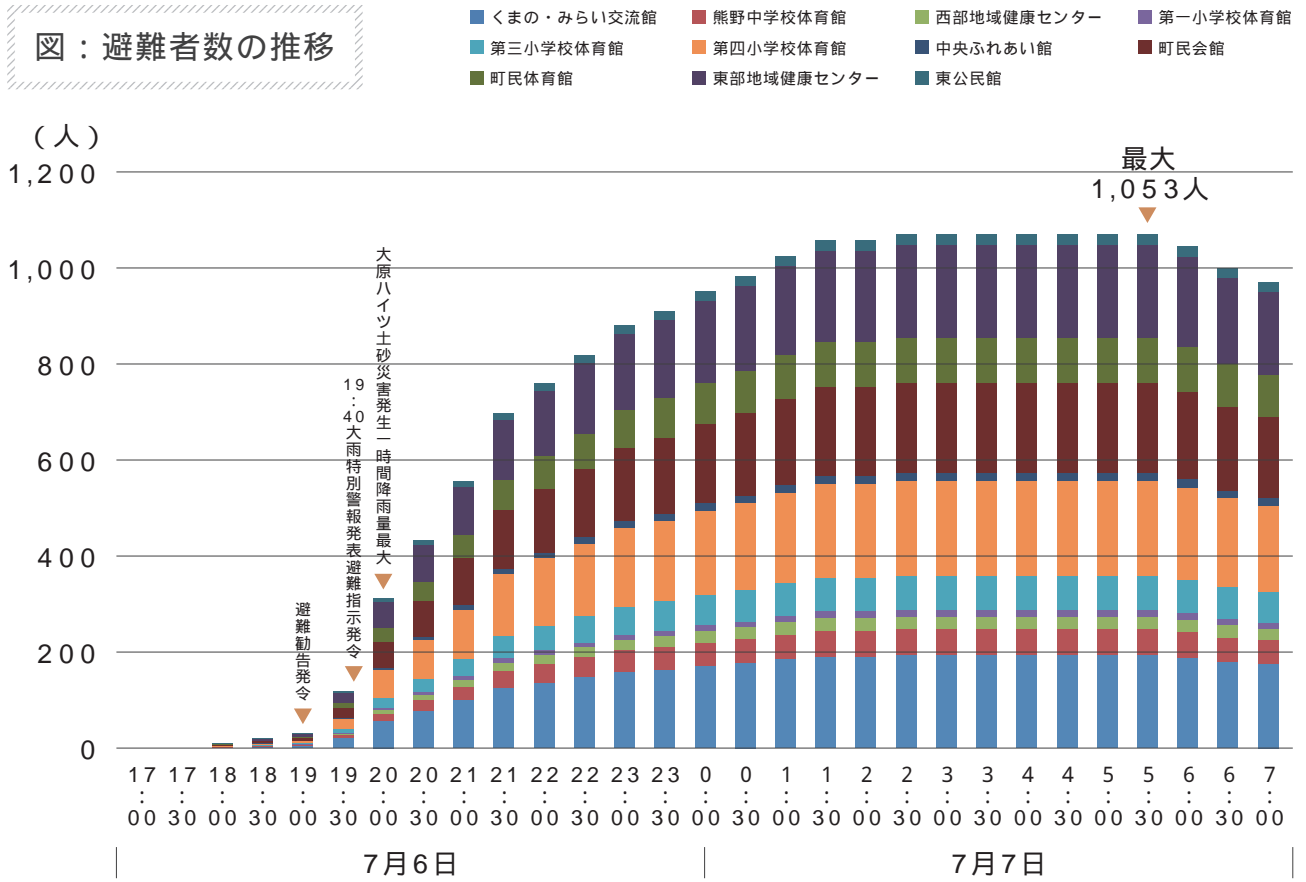
19時には大原ハイツの最寄りの指定避難所として第四小学校体育館等が開設されていましたが、道路閉塞等の結果、住民は指定避難所に行くこともできずに孤立し、救急・救助活動も難航しました。

避難所・避難者数

日付	時間	状況	
7月6日	9:30	自主避難所開設	3箇所
	17:00	避難所に移行	3箇所
	19:00	避難所追加開設	7箇所
7月7日	5:30	避難者数(最大)	1,053人
7月8日		避難所縮小	4箇所
9月6日	20:00	全避難所閉鎖	

(資料：熊野町資料)

図：避難者数の推移



(3) 救助・搜索活動の状況

7月7日から16日にかけて、自衛隊や警察、消防をはじめ延べ2,820人が救助・搜索活動に参加しました。

表：救助・搜索活動の参加人数

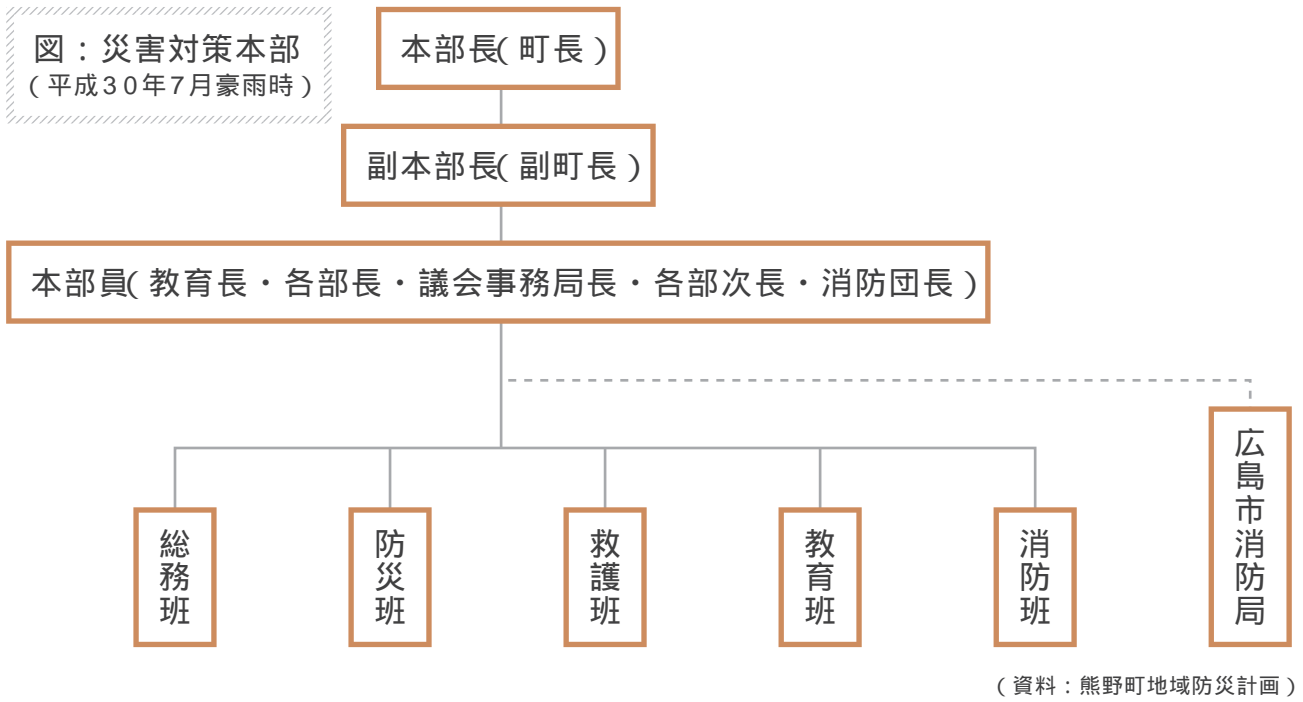
種別	人数(人)
自衛隊	401
警察	1,165
消防	998
消防団	111
建設業者	82
町職員	54
その他	9
計	2,820



（資料：熊野町資料）

4. 職員体制

地域防災計画には、基準に基づき、災害対策本部が設置される場合の体制と配備・動員等が示されています。本災害時にはこれに基づき、146人の体制が敷かれました。



大原ハイツ住民説明会



現地本部



災害対策本部会議



災害対策本部

航空写真

平成30年7月豪雨では、町内各地で被害が発生しました。町内69箇所
所で土砂崩れ、35箇所
所で河川氾濫が確認され、町内各地で道路が通行止めになりました。

また、災害発生当初は、熊野町から広島市、呉市などの周辺市町に通
じる道路が全て通行止めとなり、緊急車両も町内に入ってくるこ
が出来ず、帰宅することが出来ない方(帰宅困難者)も多く発生しました。

この写真からは、新宮、初神、城之堀、出来庭、平谷と町の北側から西
側にかけて多くの土石流が発生していることが確認できます。

また、山の頂上付近から発生した土石流が複数の谷からの土石流と合
流し、大きな土石流になったことが分かります。

注意

この情報は、国土地理院が7月9、11日に撮影した空中写真から、平成30年7月豪雨で生じたと考えられる崩壊地等を判読したものです。現地調査は実施していないことから、実際に崩壊等のあった箇所でも表示できていない場合や、平成30年7月豪雨による崩壊地以外の箇所を表示している場合があります。

崩壊地等は、崩壊地や土石流で生じた地形変化発生箇所の始点から到達地点を表現しています。崩壊地等は、長さ又は幅が概ね50m以上のものを表しています。地形変化発生箇所の始点付近を丸で表しており、地形変化範囲を線で表現しています。

崩壊地等の位置を把握するための資料で、人家等に被害の無い箇所も表示しています。

(資料：国土地理院)

新宮地区

新宮地区は、町の最北端に位置し、広島市安芸区阿野町に接しています。新宮地区では、熊野川が氾濫し、多くの田畑が浸水しました。また、土石流の発生や道路の陥没、流失など大きな被害が発生しました。

新宮一丁目(新宮南橋付近)



熊野川が氾濫し、周辺の田畑に泥水が流れ込みました。道路と水路の境目が分からなくなり車が流されています。

県道瀬野呉線(旧ひまわり市場付近)



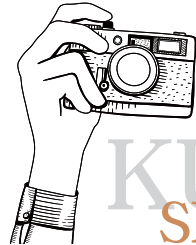
道路が陥没し、車が頭から突っ込んでいます。このような道路の陥没も町内各地で発生し、交通渋滞の大きな原因の一つとなりました。

熊野町内の被害状況



熊野川(深原地区公園付近)

普段は穏やかに流れる熊野川が、兩岸から溢れ出しています。



KUMANO
SHINGU AREA



第2部 平成30年7月豪雨の被災状況

新宮八丁目



裏山からの土石流により、家屋が押し流されました。大きな被害が発生しましたが、幸いにも死者、重傷者などの人的被害はありませんでした。

大迫川(新宮一丁目)

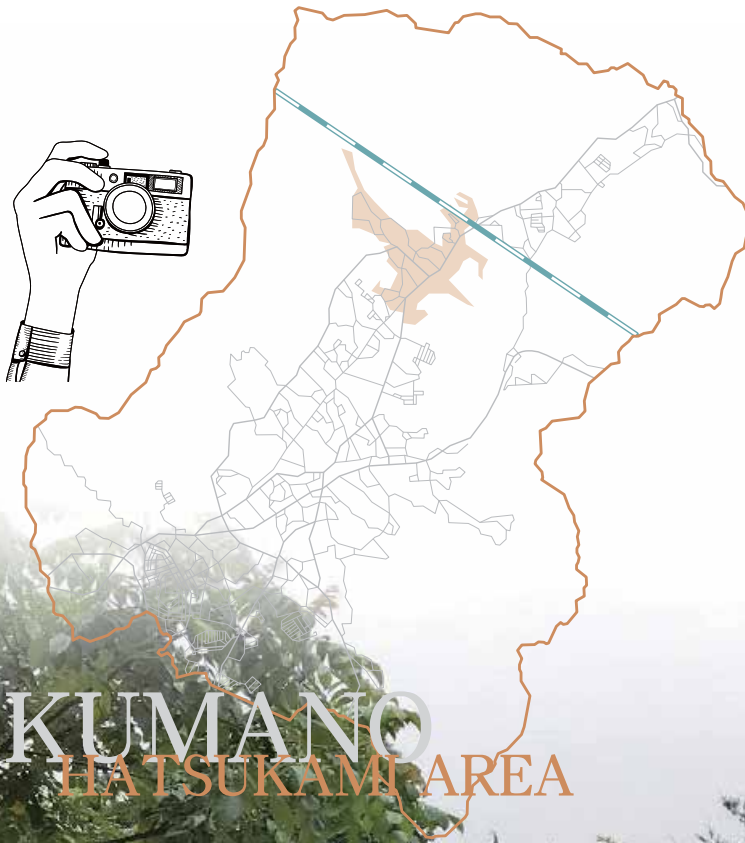


普段は、水量の少ない川ですが、上流から流れ出た石や土砂などが川を埋め尽くしています。

雲母林道



雲母の名水に通じる道路も、土砂崩れにより通行止めとなりました。



初神一丁目(熊野川)



川の護岸が崩れています。この付近は非常に広い範囲で川の護岸が崩れる被害が発生しました。

初神地区

初神地区は、三谷川上流の土石流により、空地地区では建物被害が発生しました。また、三谷川が氾濫し、県道瀬野呉線が浸水し通行止めになるなど、大きな被害が発生しました。

初神四丁目(空地)

三谷川の上流から流れ出た土石流により、家屋の周りに土砂が流れ込んでいます。空地地区でも、家屋被害が複数発生しました。



熊野第二小学校プール



土石流により、プールの中にも土砂が堆積し、プールの周りには大きな石が転がっています。

新埴川



普段は、水の流れの少ない川からも、土石が流れ出し、川を埋め尽くしました。

初神二丁目(三谷川)



護岸が崩壊し、道路まで抉り取っています。水の勢いが凄まじかったことがよく分かります。

初神四丁目(空地)



三谷川上流部から流れ出した土石流。山深い場所から大規模な土石流が発生したことがよく分かります。

初神三丁目(三谷川)



東公民館方面から見た、三谷川の氾濫状況。辺り一面の田畑が泥水で覆われています。

初神一丁目(県道瀬野呉線)



三谷川から溢れ出た水が道路を覆い、通行出来なくなりました。このため、町中心部と新宮地区との往来が出来ない時間もありました。

初神三丁目(三谷川決壊箇所)



三谷川の護岸が崩壊し、田畑に流れ込んでいます。ここから流れ出した水が県道瀬野呉線まで流れ出し、道路を塞ぎました。

初神三丁目(初神こども園付近)

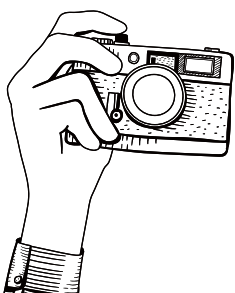


7月6日19時頃。既に熊野川が越水し、県道瀬野呉線に流れ出しています。

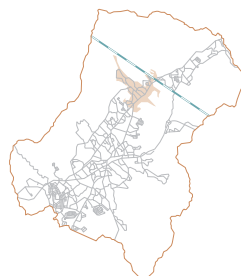
初神一丁目(セブンイレブン熊野町初神店駐車場)



町から周辺の市町に通じる道路が全て通行止めとなり、町内のコンビニエンスストアやスーパー等の駐車場に多くの帰宅困難者が身を寄せました。



KUMANO
HATSUKAMI AREA



萩原九丁目(湖翠園団地)



湖翠園団地の裏山から流れ出した土石流により、家屋が押し流されました。

萩原八丁目(萩原交差点付近)

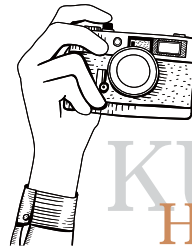
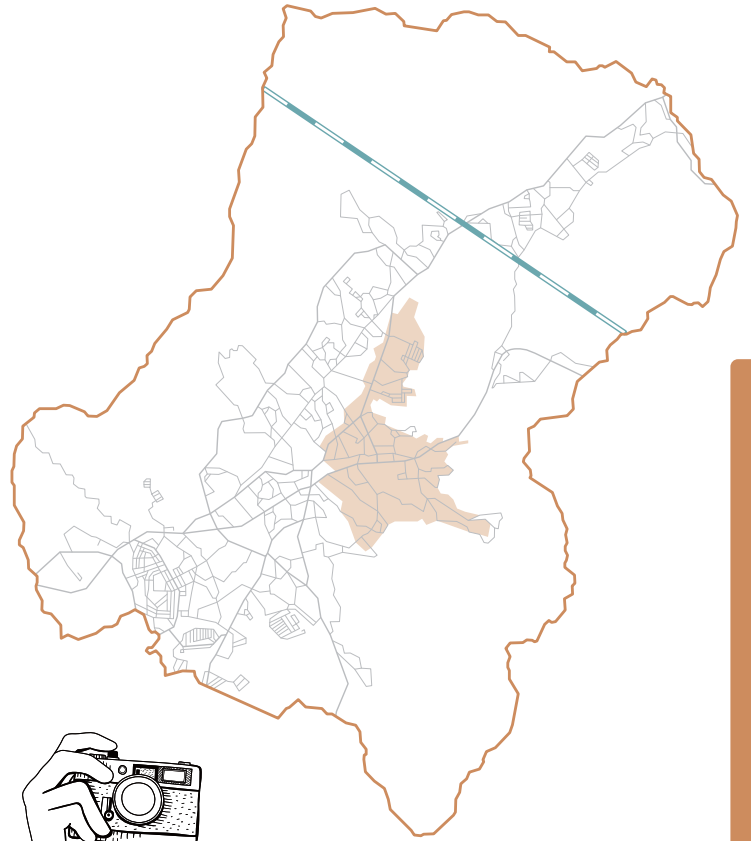


道路が冠水し、立ち往生する車両がありました。

萩原九丁目(湖翠園団地)



土石流の調査が国土交通省から派遣された職員により行われました。



KUMANO HAGIWARA AREA

第2部 平成30年7月豪雨の被災状況

萩原二丁目(道上奥)

多くの田畑でこのような土砂崩れが発生し、農作物にも大きな被害が生じました。

萩原地区

町の中央部に位置する萩原地区は、県道瀬野呉線、矢野安浦線と町の幹線道路が通過する地区ですが、道路の冠水や土砂崩れ等により、大規模な交通渋滞が生じました。また、湖翠園団地や土岐ノ城団地の裏山では土石流や土砂崩れが発生し、一時、団地内のほぼ全ての方が避難されました。

狐池



土石流が狐池に流れ込みました。このようにため池に土砂が流れ込み、砂防ダムとしての役割を果たした箇所も複数ありました。

城之堀地区

城之堀地区では、大規模な土石流が多数発生しました。墓地やため池、田畑で大きな被害が出ましたが、幸いにも人的被害は発生しませんでした。この度の災害では、農道熊野北線が土砂を受け止める大きな役割を果たしたようです。

城之堀不動堂



町の文化財である不動堂にも土石流が押し寄せました。

後迫鉄工所



山際に立地する工場等も町内各所で土石流に襲われました。

農道熊野北線



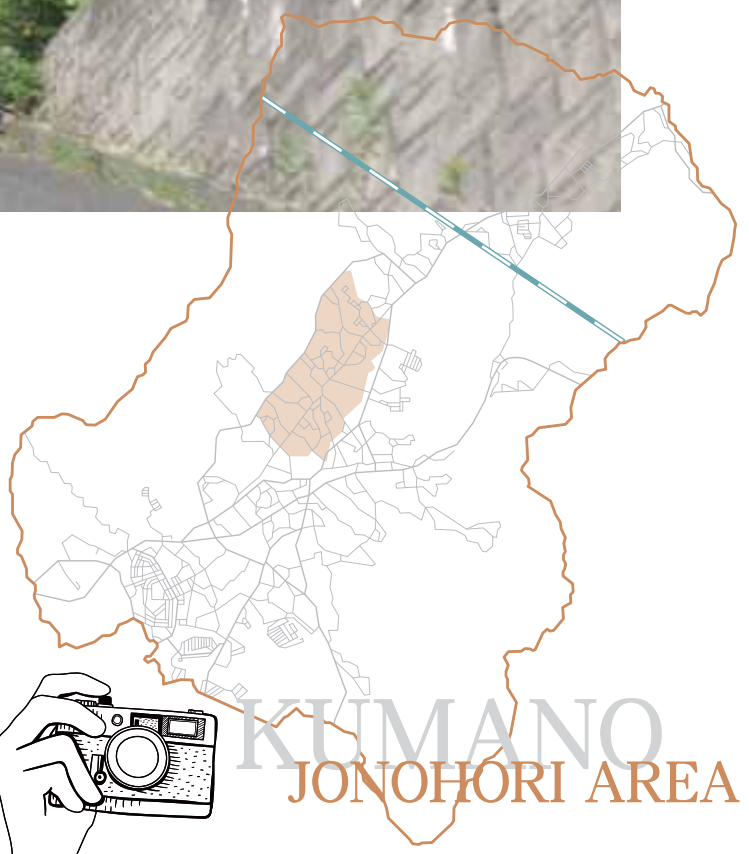
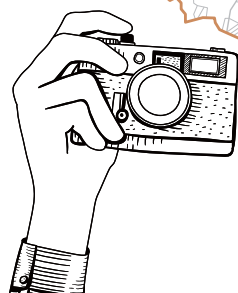
土石流により複数の箇所農道熊野北線は通行できない状況となりましたが、土石流を農道熊野北線で受け止めたことにより、下流の家屋では大きな被害は発生しませんでした。



狐池付近空撮

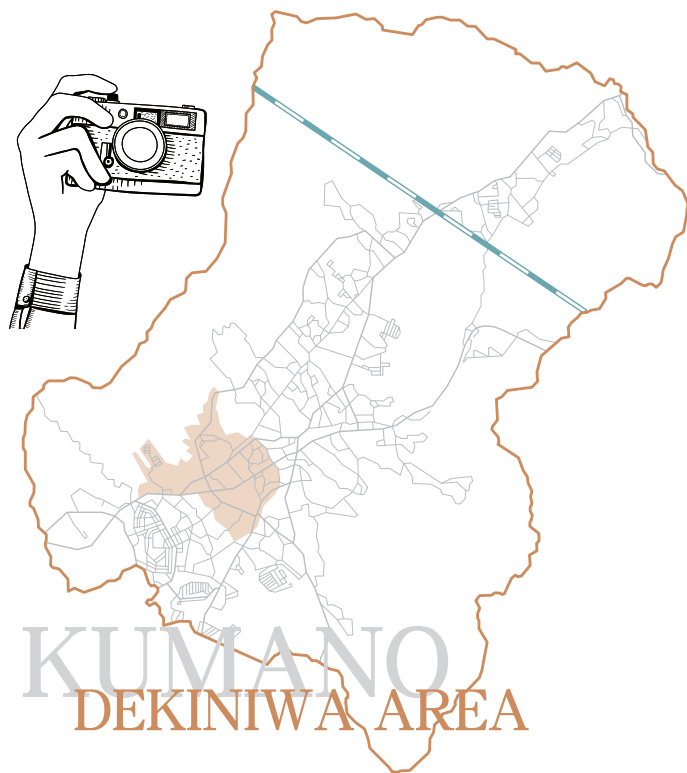


山頂付近から複数の大規模な土石流が発生している様子が分かります。



出来庭十丁目

火ノ原団地の上部でも土砂が流れ出し、複数の家屋で被害が発生しました。



出来庭九丁目(滝ヶ谷団地)



団地裏山から流れだした土石流を砂防ダムが受け止めました。このダムの効果で滝ヶ谷団地では大きな被害は発生しませんでした。

出来庭一丁目



道路下を洗い流し、大きな空洞となり道路が陥没しました。

出来庭地区

出来庭地区では、土石流により出来庭九丁目、十丁目では家屋の被害が発生しました。

また、上流からの流木や土砂が慶神橋にひっかり川を閉塞し、周辺の家屋では、床上浸水の被害が発生しました。

筆の里工房駐車場



椎川上流から流れ出た土石流により、筆の里工房の駐車場が土石や流木に覆われました。



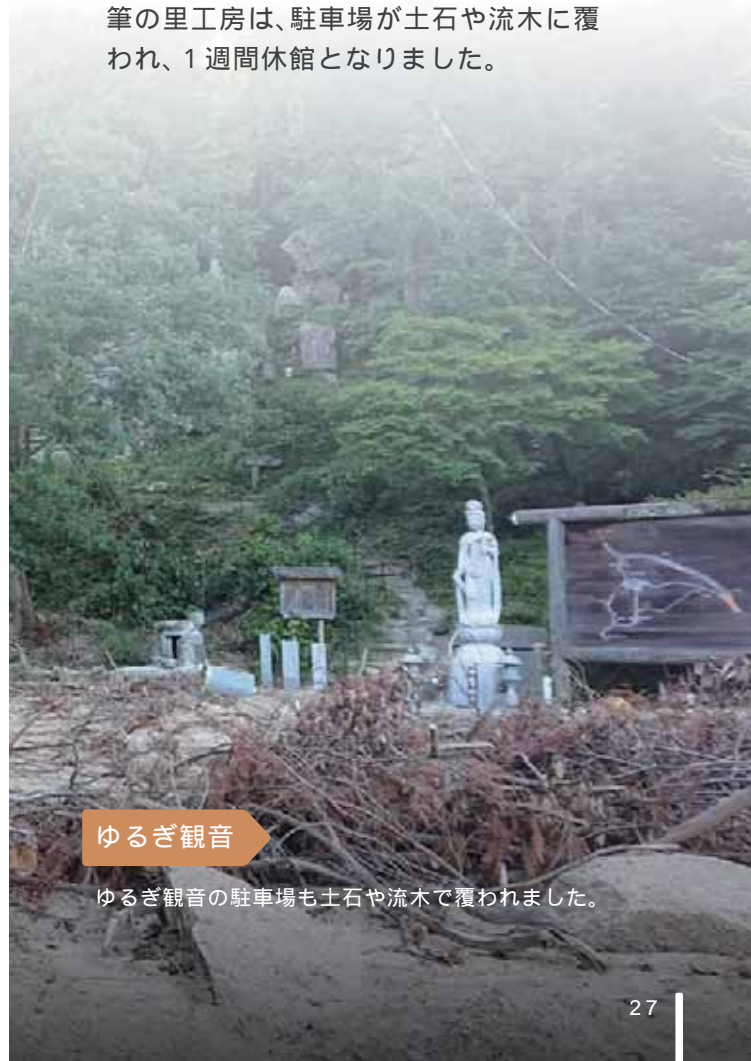
筆の里工房



椎川上流から流れ出た土石流が、一部、筆の里工房の敷地内にも流れ込みました。

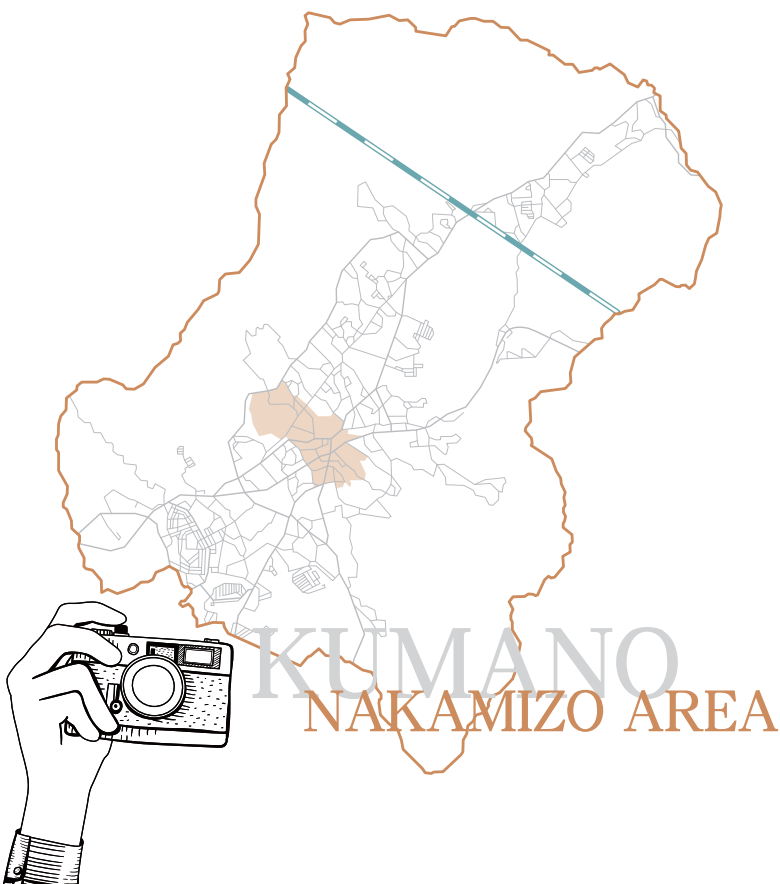
〔 中溝地区 〕

中溝地区でも多くの箇所で被害が発生しました。農道熊野北線を通行中、土砂崩れが発生し行き場を失った方が、数名、筆の里工房へ避難されました。筆の里工房は、駐車場が土石や流木に覆われ、1週間休館となりました。



ゆるぎ観音

ゆるぎ観音の駐車場も土石や流木で覆われました。



皇帝ハイツ(航空写真)



皇帝ハイツの裏山から、東側に向かって土石流が流れ出しています。

呉地地区

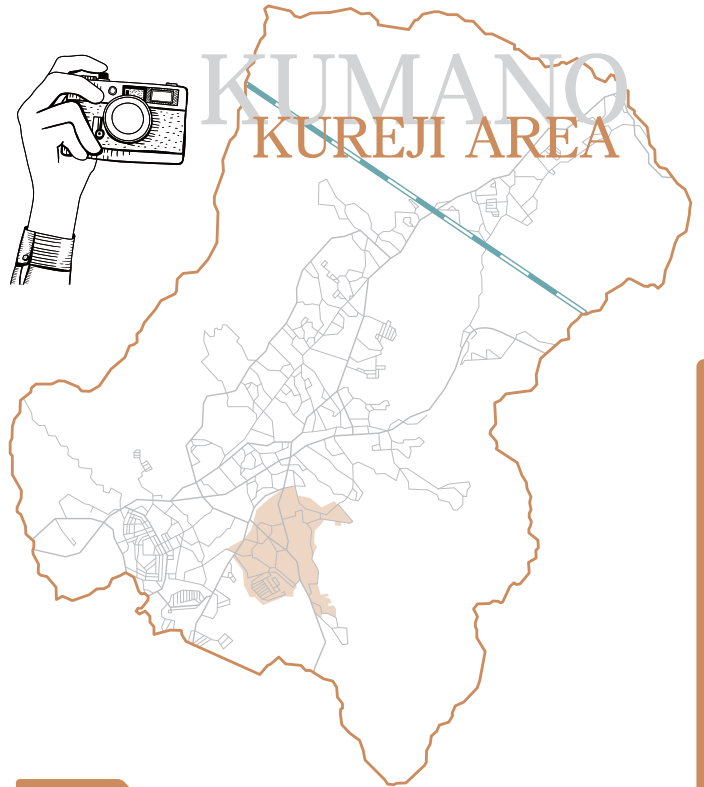
呉地地区は、町の南端に位置し、呉市と接しています。呉地ダムや皇帝ハイツ周辺などで、土石流が発生しました。

また、床上浸水や床下浸水など住家被害も生じました。

呉地公園付近



流れ出した土砂が道路を覆っています。山際の道路ではいたる所でこのような状態になりました。



砂 橋



二河川の越水により、県道瀬野呉線の砂橋も土砂で覆われました。この先で土砂崩れが発生し、苗代方面は通行止めとなりました。

呉地三丁目付近



三戸山橋付近から二河川が氾濫し、付近の田畑が泥水で覆われ、家屋が孤立したような状況になっています。

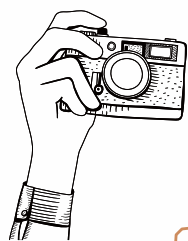
呉地ダム

呉地ダムも土石流により土砂や流木で埋め尽くされました。このようにため池などが土砂を受け止めた場所も多くありました。

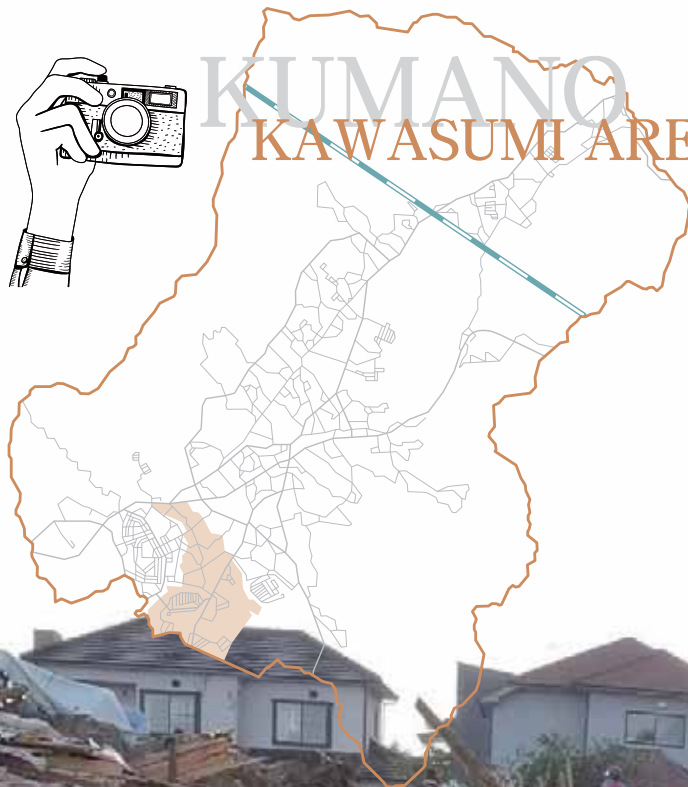
川角地区

川角地区では、三石山からの大規模な土石流により、大原ハイツにおいて12名の尊い命が犠牲となりました。

この度の土石流は、コアストーンと呼ばれる1m以上ある大きな岩が流れ出し、家屋をなぎ倒し大きな被害が発生しました。



KUMANO
KAWASUMI AREA



川角五丁目(大原ハイツ)

土石流によって流された家屋や車をよけながら懸命の捜索が行われました。土石流の破壊力の凄さと被害の大きさがよく分かります。



川角五丁目(大原ハイツ)



大原ハイツでの捜索の様子。消防、警察、自衛隊、消防団等全国各地から応援に駆け付けていただきました。

川角五丁目(大原ハイツ)



大原ハイツでは火災も発生しました。消防団は救助活動と並行して、消火活動も行いました。

川角五丁目(大原ハイツ)



三石山からの土石流は、20時過ぎに第一波が発生したとみられています。大きな木や土砂が家屋を襲いました。

川角五丁目(大原ハイツ入口)

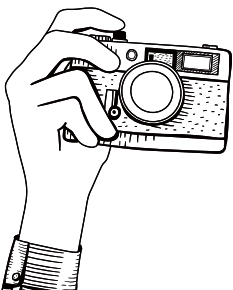


三石山から流れ出した土石流は、大原ハイツの入口付近にまで流れ出ていました。

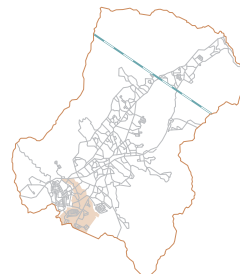
川角三丁目(二河川・川角大橋付近)



道上川や石風呂川と合流した二河川は、川角地区でも氾濫し、道路を覆い、泥水が田畑に流れ込みました。



KUMANO
KAWASUMI AREA



川角五丁目(大原ハイツ)



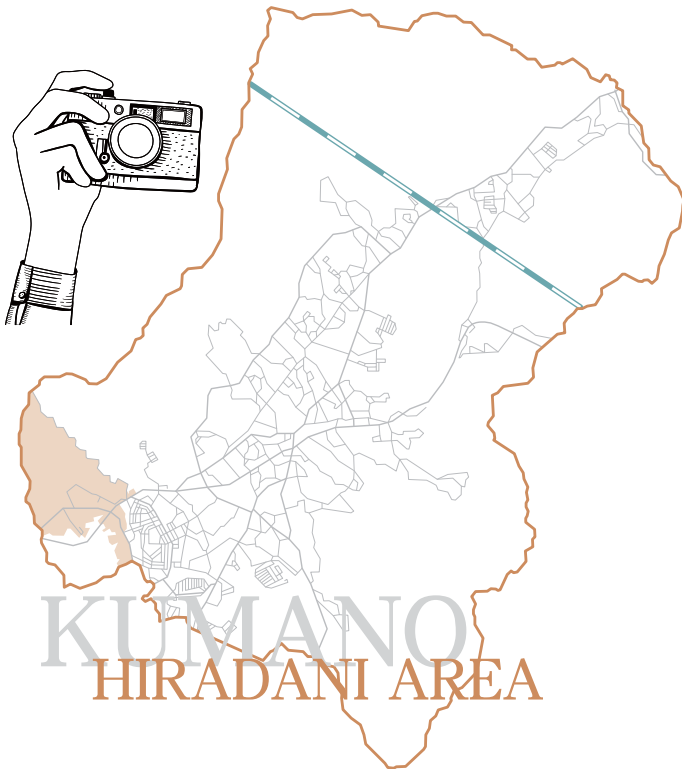
発災の翌朝から自衛隊による救助活動が開始されました。ぬかるんだ足下や大きな岩がゴロゴロしている困難な状況の中、懸命に活動していただきました。

大原ハイツ(空撮)



二つの大きな土石流が大原ハイツを襲いました。大原ハイツ東側では大規模な土砂崩れも発生し、大原ハイツと外部との接続道が全て遮断されました。

広島県砂防課提供



平谷二丁目



裏山でがけ崩れが発生し、流れ出した土砂が家屋に押し寄せました。平谷地区でも数件で家屋被害が発生しました。

平谷三丁目



崩れた土砂が耕作中の田んぼに流れ込みました。このように農地被害は、町内53箇所を確認されました。

串掛林道

串掛林道は、各所で崖崩れ、土石流の影響で不通となりましたが、自衛隊の活動により、土砂が取り除かれました。



平谷地区

平谷地区では、串掛林道が土石流により通行止めとなり、ヘリコプターによる救出活動も行われました。

また、多くの田畑に土砂が流れ込み大きな被害が発生しました。

矢野峠 (広島市安芸区)

熊野町と広島市を結ぶ県道矢野安浦線(矢野峠)においても、大規模な土石流により、甚大な被害が発生しました。渋滞中に土石流に巻き込まれ、熊野町民の方も重傷を負われました。

県道矢野安浦線



矢野峠で立ち往生した方の中には、広島熊野道路へ梯子を使って救助された方もいたようです。

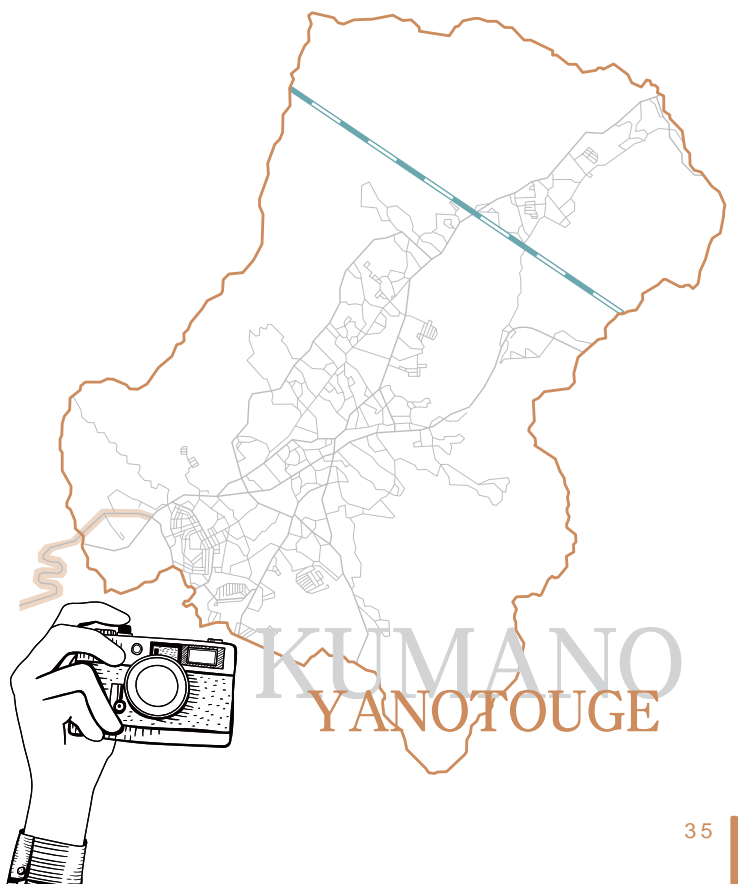
矢野川



発災時には、土石流が矢野川沿いに流れ出し、矢野天神付近でも大きな被害が発生しました。

県道矢野安浦線
(旧広島熊野道路料金所下付近)

熊野町と広島市、海田町を結ぶ県道矢野安浦線では、昭和入口交差点付近で大規模な土石流が発生し、8月31日まで通行止めとなりました。



避難所

町では、町民会館、東部地域健康センター、くまの・みらい交流館、町民体育館の4施設を長期避難所として開設しました。避難所の運営には、地域の方や学生ボランティア、三重県からの応援職員等非常に多くの方にご支援をいただきました。



町民体育館(自衛隊風呂)



自衛隊から提供いただいたお風呂(写真は、第9師団(青森県))、町民体育館に長期避難となった方にとって、心のオアシスになりました。



町民体育館

最も多くの長期避難者を受け入れた町民体育館。最大で100名近い方が避難されました。

町民体育館



被災直後の町民体育館。

東部地域健康センター



長期の避難所となった東部地域健康センターでは、子どもたちのために、勉強コーナーを設けました。

町民体育館(自衛隊風呂)



広い浴槽にシャワーなど、充実した設備が揃っています。

東部地域健康センター



東部地域唯一の避難所として、避難者が多いときには、部屋に入りきれず、廊下にも毛布を敷いて対応しました。

現地で体験した被災写真

豪雨により、町内各地で多くの被害が発生しました。
後世に伝承するために、町民の方々より写真を提供いただきました。改めて、心から感謝申し上げます。

空地地区



撮影：2018年7月12日 》 流木と土砂で床上浸水、車も半分埋まる。

自宅対岸



撮影：2018年7月14日 》 山崩れの現地調査を行う国土交通省の職員が入られる。

空地地区



撮影：2018年7月9日 》 流木が外壁を壊し堆積。

空地地区



撮影：2018年7月16日 》 川底がフラットなコンクリートの上に土砂流木が2m以上堆積。

提供者：飯国 清 様



空地地区

撮影：2018年7月9日 》 三谷川の護岸を越えた流木。

提供者：大串 晋 様



城之堀八丁目 撮影：2018年7月7日 農道熊野北線土砂流入。

川角五丁目



撮影：2018年8月11日 大原ハイツ ボランティア参加時撮影。

中溝五丁目



撮影：2018年7月7日 筆の里工房山側。

初神三丁目



撮影：2018年7月7日 三谷川氾濫。

大原ハイツ



撮影：2018年 災害土砂撤去。

町民ランド



撮影：2018年 災害がれき類集積。

熊野第二小学校北側



撮影：2018年 土石流による被害の状況。

提供者：(株)熊野技建 様



セブンイレブン熊野町初神店前 撮影：2018年 県道瀬野呉線。

提供者：小林 義輝 様



矢野境付近

撮影：2018年7月7日 》裏山が崩れ埋もれた家。

串掛林道



撮影：2018年7月14日 》愛宕神社入口の土砂崩れ。

山本製作所付近



撮影：2018年7月7日 》流されて水路にはまった車。

県道矢野安浦線
(旧広島熊野道路料金所下付近)



撮影：2018年7月10日 》土砂や流木に埋まる車。

県道矢野安浦線
(旧広島熊野道路料金所下付近)



撮影：2018年7月10日 》路面の落盤により通行不能となった。

昭和入口



撮影：2018年7月10日 》昭和入口。信号機が埋もれている。

昭和入口



撮影：2018年7月10日 》昭和入口の道路は土砂で埋もれ信号機がなぎ倒されている。

大原ハイツ入口部



撮影：2018年7月7日 大原ハイツ入口部の土砂崩れ。煙は家屋火災による。

大原ハイツ方面



撮影：2018年7月14日 呉市押込地区から見た大原ハイツ方面。

大原ハイツ入口部



撮影：2018年7月7日 夜中には30cm以上の水が道路に溢れる。

町民体育館



撮影：2018年7月9日 ごみ処理、世話人-生活用品飲料支援。

大原ハイツ内



撮影：2018年7月9日 土石流で車が家屋直撃し、火災発生。隣人の助け合いで無事に避難。

大原ハイツ入口



撮影：2018年7月27日 入口の倉庫、側溝塞ぐ。町へ調整&除去依頼。

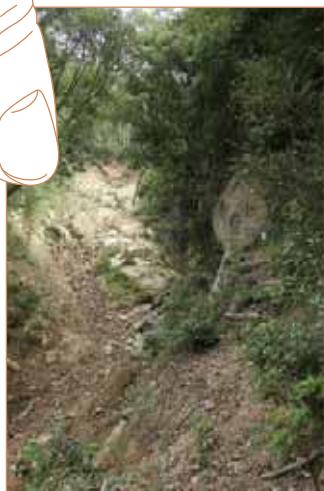
提供者：田中久也様



大原ハイツ入口部

撮影：2018年7月9日 ファミリー公園側から大原ハイツ入口部の土砂崩れ。消防団進入口。

提供者：野田悦登様



中溝ゆるぎ観音

撮影：8月4日 豪雨災害の爪痕は今に残っていました。

中溝ゆるぎ観音



撮影：8月4日 豪雨に耐えた観音様。

新宮宛団地前



撮影：8月4日 砂防ダム工事の付替道路工事中。

農道熊野北線



撮影：8月4日 今だに爪痕が残る災害現場。大型土のうによる応急対策が今だに続く。



新宮八丁目



屋根につぶされた愛車。

新宮八丁目



裏山からの大量の土石流。

新宮八丁目



土砂は家の中にまで流れ込んできました。

新宮八丁目



裏山からの大量の土石流。

提供者：林保様



新宮八丁目

孫の呼びかけで避難。難を逃れました。

第3部



語られる体験談

豪雨災害を経て、 職員の意識も 前向きに変わった

〔危険が伴う状況で消防団が奮闘〕

7月6日は朝一番から会議を開き、豪雨になった場合に町がどういう体制を取るのか協議してから緊迫した一日が始まりました。時間が経つにつれ、道路が冠水した、農地が崩れそう、ため池が決壊しそうななどの連絡が入り、各担当者が忙しく対応にあたっていました。17時を過ぎてからも幹部と防災担当職員は全員庁舎につめており、19時40分に大雨特別警報が発令されるとすぐに職員に召集をかけました。町職員はほとんどが町内在住で、招集訓練も事前に行っており、速やかに対応できたと思います。

2時過ぎに大原ハイツで、家がいくつも倒壊し、生き埋めになっている人がいるという情報が入り、町長が自衛隊に派遣を要請しました。しかし、いろんな所で道が崩れ、交通渋滞が起きていたため到着が遅れ、安芸消防署熊野出張所も他町の現場へ出動中で、帰ってくる事ができません。そうした中、消防団の人たちには深夜の危険が伴う状況下で、被災者の救出や消火などに最善を尽くしていただいたと思います。

〔多方面からの温かい協力〕

翌朝には自衛隊や警察も到着し、本格的な行方不明者の捜索に入りました。その一方で避難所の運営もしていかなければいけません。長期間の避難は今まで経験がなかったので、交通事情が悪くて物資を容易に運び込めない中、職員みんなで模索しながら取り組みました。総務省の対口支援で来ていただいた三重県各自治体の職員の方々や広島市の災害予防課長、自衛隊、自衛隊隊友会の方々には、対策本部や避難所の運営などでたいへんお世話になりました。

豪雨災害によって、町職員の意識も変わったと思います。臨時災害放送局「くまのちょうさいがいエフエム」がスタートし、職員がチームを組んで有益な地域の情報の発信に取り組んでくれました。



前・副町長
内田 充さん

復興への思い



〔一丸となって災害に強いまちを〕

私は今回の豪雨災害が起きるまで、熊野町は災害に強い町だと認識していました。災害はどこでも起こりえます。行政も全力で取り組みますが、「公助」だけでは対処ができません。町民の皆さんに「自助」「共助」に取り組んでいただく必要があります。発災後は災害関係に特化した地域懇談会を開いて、町内の各地域を回りました。町の防災力を強化するため、専属の部署を作り、自衛隊OBの方などに入ってもらっています。

災害はいつ起こるか分かりません。熊野町はまとまりの良いまちです。もちろん行政も動いていきますが、住民の皆さんにも協力していただいて、災害に強いまちづくりを進めていくことができたと思います。

「予想を超えた大規模な土砂災害」

7月6日は5時40分に大雨警報を知らせる防災メールの着信で目覚めました。強い胸騒ぎを感じ、直ちに朝一番で会議を開くよう指示を出し、急ぎ出勤しました。雨脚が強まり緊張感が一層高まった夕刻は、水位の上昇により決壊する恐れのあるため池の情報に危機感をつのらせ、全力で避難誘導活動を展開しました。ですから、20時過ぎに大原ハイツで大規模な土砂災害が起こり、火災が発生しているとの知らせに呆然としました。21時過ぎには自衛隊派遣が要請されましたが、翌朝7時の対策本部会議でも正確な情報はつかみきれませんでした。その後、避難所の運営や支援物資などの調整、マスコミ対応、警察や町議会、県危機管理課との連絡調整、首相や大臣の視察スケジュールの調整などに日々追われました。

8月初旬に体調を崩し、1週間ほど休養を余儀なくされ職場に迷惑をかけてしまいました。体もですが、土石流の犠牲になられた方の遺体発見の連絡や、検死の結果を受けるのが精神的につらかったですね。

「感銘を受けた三重県の姿勢」

三重県からは延べ802人も職員を派遣していただき、物心両面でたいへんお世話になりました。三重県の防災担当課長から派遣決定後すぐに電話があり、「広島県庁との調整はすべてこちらがするから、一切心配することはありません」と言っていただき、とても心強かったです。秋になって落ちついてから町長とともに三重県庁や主要な市町を廻ったのですが、「我々も災害現場に直面する機会は多くはありません。災害派遣の体験をさせてもらってありがとうございました。ゆくゆくは自分たちにも役に立つはずです」と、逆にお礼を言われたのです。防災・減災に取り組んでいくにはこういう姿勢が大切なのだと思感しました。

「未来に向け動き続ける条例」

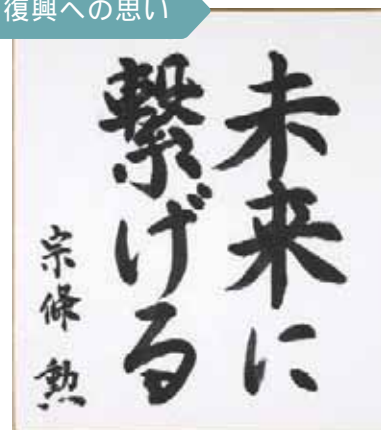
12人の方が亡くなったという事実を行政は真摯に受け止めています。平成31年2月から町民の方々に参画いただき「防災・減災まちづくり会議」を開催し、その成果も踏まえた「熊野町防災・減災まちづくり条例」が令和2年3月に制定されました。毎年議会で町の取組みを報告し、フィードバックを受けて改善する「動き続ける条例」として運用を始めています。「第6次熊野町総合計画」も、「命の保護」をベースにした計画づくりに取り組んでいます。豪雨災害を振り返ると反省すべき点は多いですが、未来に目を向けないと、反省は役に立ちません。国も地方も財政は厳しいですが、防災・減災を最優先して知恵を絞っていきたくと思っています。

災害を教訓に、命を
守るまちづくりを
進めています



総務部長
宗條 勲 さん

復興への思い

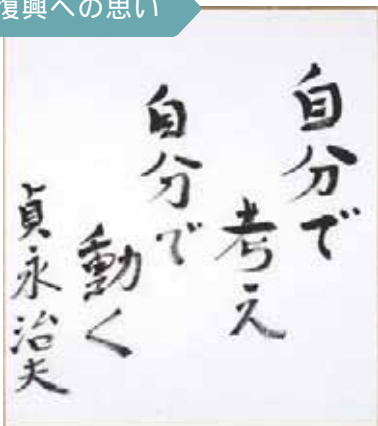


豪雨災害時の状況を 他方向から検証し、 次の災害に備える



住民生活部長
貞永 治夫 さん

復興への思い



〔新たな災害対応部署を設立〕

発災時は企画担当部長で、7月6日は道路の通行に関する情報の整理や電話対応をしていたのですが、刻々と状況が切迫していく中、大原ハイツ被災の第一報を受けました。翌日からはどういう風に対応して良いのか分からない難題が山積みでしたが、一番困ったのが物資の手配です。周辺道路が不通になったため、お店にも商品がありません。避難所の食事の手配もたいへんでしたが、夏休みに入る直前だったため学校給食業者に依頼して何とか間に合わせることができました。

そうするうちに災害対策本部に直結した部署が必要だということで、7月20日に防災担当グループとして、総務部の中に危機管理監と危機管理課が新たに設けられました。各課の災害担当業務の調整や対外的な危機管理などがその役割で、私も配属されました。

〔災害時の対応を多方向から検証〕

私の担当は主にマスコミ対応で、不確かな状況でもマスコミ各社から早急な回答を求められるので困っていたところ、熊野町が19時に避難勧告を出したのは3時間遅かったのではないかとという新聞記事が掲載されたのです。しかし、7月6日の16時の段階では避難勧告を出せる条件は揃っていませんでした。町としても当時の状況を詳細に説明し、外部の視点から検証してもらい、間違ったところはしっかり意見をもらって、今後に起きる災害に対処するため「平成30年7月豪雨災害」検証委員会を立ち上げました。委員会は、平成30年11月から翌年3月まで6回開かれました。その提言を生かして「熊野町防災・減災まちづくり条例」を制定することができました。

〔若い世代への期待〕

豪雨災害を教訓に、住民が自分たちで避難するかどうかを判断するための情報を正確に伝える仕組みはできつつあります。行政が一人ひとりに直接避難を呼びかけられないので、住民が自ら判断をし、避難する住民間の共助がとても大切です。豪雨災害を経て被害を受けた地域の人たちの防災への意識は高まっていますが、そうでない所の人たちとの間に温度差があります。意識の底上げをしていくため、今後より小さな単位での避難訓練を行う予定です。特にイエローゾーンやレッドゾーンの指定区域の人たちには参加していただき、早期避難の重要性を体で覚えていただきたいです。大切なのは、自分で考え、自分で動くことです。特に今後のまちづくりを担う若い人たちには、自治会や自主防災組織の運営に積極的に協力していただきたいです。

発災の4日後にいち早くボランティアセンターを立ち上げ、資機材の手配や駆けつけたボランティアの方たちの活動調整など、センターの運営にあたった社会福祉協議会のお二人にお話を伺いました。

「手探りの状態からスタート」

7月6日は災害が発生した場合に備えて社協の事務所で避難用に福祉車両などを用意した後、二人とも消防団員として出勤しました。大原ハイツで住民の救出にもあたり、今まで経験したことのない大変な事態になっていることが分かったので、一日も早くボランティアセンターを立ち上げなければいけないと思いました。発災の翌日に社協の各班で分担して町内を回り、被災状況とボランティアニーズの把握に努めました。週が明けた9日に町と協議をし、10日にボランティアセンターを立ち上げました。道路状況が悪くてまだ外部から熊野町に入って来られない状況でしたが、被害がひどく、広範囲に渡っているので、最低限の人数でもとりあえず始めなくてはいけないと思いました。

「関東など、遠方から駆けつけた人も」

ボランティアの仕事は、床下や溝の土砂かき、土砂を取り除いた後の清掃、瓦礫の撤去などの手作業で、重機が入れない所を中心に行いました。設立当初はニーズが少なかったのですが、センターのことが広まったり、近所でボランティア作業をしているのに接したりして、徐々に頼まれる方が増えていきました。

交通事情もあって、基本は町内からボランティアを受け入れていたのですが、「来るものは拒まず」というスタンスで、大原ハイツが大きく報道されたこともあり、遠方からもたくさんの方が来られました。駐車場が広がったので、そこで寝泊りしていた方も多いようです。

「災害に対処できる地域づくりを」

ボランティアセンターは10月末まで運営し、最終的に延べ約2000人、実質200人くらいの方に参加していただきました。お盆くらいまではほぼ休みなく動いており、夏休みは高校生や帰省した大学生とその友人たちのチームが多かったですね。当時は明日の仕事が山ほどあるギリギリの状況で、今振り返っても成果というより、反省材料の方が多いですね。「ボランティア講座」を開くなど、万が一に備えてこつこつ地道にやっていくことの大切さを感じています。歳月が経って記憶があいまいになっていることも多いので、記録をしっかり残すことの必要性も痛感しました。

災害に対処していくには、地域のつながりが大事です。社協の基本として、まさかの時は協力体制を取れ、避難に際して声かけができるような地域づくりを進めていきたいです。

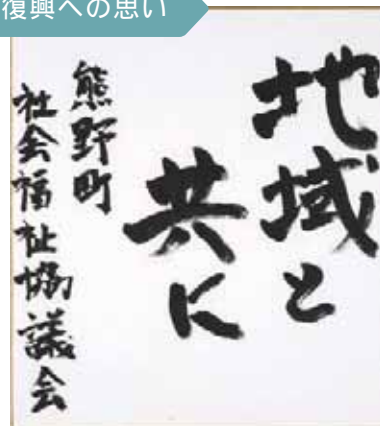
毎日がギリギリの
状態で、振り返ると、
反省点の方が多い



社会福祉協議会ボランティアセンター

小澤 克朗 さん
平垣内 康二 さん

復興への思い



被災者の生活を支える 総合的な支援を行う

熊野町では、豪雨災害で被災された方々の日常生活を支えるため、見守り、生活支援、健康づくり・介護予防などを行う「地域支え合いセンター」を開設し、令和3年3月まで総合的な支援を実施しました。

「被災された方の不安に寄り添う」



センター長
加島 朋代 さん

当センターは平成30年9月7日にスタートしました。広島県内(13市町)では、一番早く開設されたセンターです。町の保健師等が、災害直後から被災者の健康状態の把握を行っていたことで、センターの対象者の把握がある程度できていたことや、センター閉鎖後の引き継ぎを考えて、町の保健師と高齢者の相談支援を行っている地域包括支援センターの専門職が兼務する町直営での開設となりました。

支援の対象者は、被害の大きかった大原ハイツの全世帯のほか、仮設住宅の入居世帯や床上浸水の被害を受けた世帯などの194世帯491人です。この中には帰宅途中で町外で重傷を負った人も含まれています。

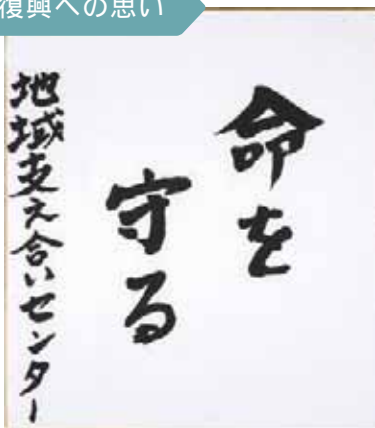
具体的な業務として、個別支援と地域支援がありますが、個別支援は、担当職員が仮設住宅やご自宅を訪問し、お話を伺うことが主となります。被災された方は誰もが不安を抱えておられます。寄り添い続けることが大切ではないかと思っています。また、様々な相談を受けることもありますが、相談の内容によっては、町の関係部署につないだり、県の関係機関と協力し、子どもさんのこころの相談会や、弁護士や司法書士等の専門家による相談会を実施しました。

地域支援ですが、大原ハイツ交流会を自主防災会や社会福祉協議会と一緒に実施しました。この交流会には、消防署や消防団の協力もいただきました。また、お茶を飲みながら集っていただくサロンも開催しましたが、日中は勤務されている人が多いこともあり、参加人数が少なく、継続実施に至らなかったことは残念に思っています。

センターは令和2年度いっぱいでの役割を終えますが、被災された方が少しずつでも不安を解消していくためのお手伝いをすることができたのではないかと考えています。

私が関わった方では、家族を亡くされ、生き残ったことを後悔されていた方が、ご近所やお知り合いの方との交流の中でこれからのことを話されるようになり、「二度と後悔はしたくない」と人生の大きな決断をされたことが印象に残っています。

復興への思い



「継続的にケアすることの大切さ」



尾崎 麻里 さん

被害集中地区にのみ注目がいく中、別地区で同じように被災された方達の取り残され感や不安がとても大きいと感じました。声かけに、忘れられてないと安心される方も多く、被災者1人1人に向き合うことの大切さを学びました。



松本 奈津美 さん

ご家族を亡くされた直後、悲しさ等の感情を表に出されなかった方が、関わって1年たった頃、自分の気持ちを話してくださいました。災害直後だけでなく、被災された方への継続的な心のケアの必要性を痛感しました。



森川 裕美 さん

被災された方が困っていることをすぐに話して下さるというわけではありません。会話の中でその方の気持ちを感じて、本当に困っていることを支援することが真の支援なのだと気づきました。



中村 美穂 さん

本人が被災したり、突然、友人や知り合いを失った児童・生徒達は、災害後も風雨や消防車のサイレンに怯えることも。継続したカウンセリング等、心のケアの重要性を実感し、成長を見守りながら、丁寧な支援を大切にしたいと思いました。



尾濱 あかね さん

発災直後は身内の安否をたずねる悲痛な問い合わせが多く、家族の絆の強さを感じました。



水主川 明日香 さん

雨が降ると不安、道路も怖いと言われていた方が通院され、笑顔になられた時は嬉しかったです。



熊谷 真理子 さん

被災された方の中には赤ちゃん連れの方もおられ、お母さんの心に寄り添えるよう心がけ支援をしました。



大久保 知加 さん

家や物を失っただけでなく、家族のバランスが崩れかけている方達も多く、対応に苦慮しました。



三村 千恵子 さん

さまざまな不安を抱えていた高齢者の方々を、物心両面で支えられるよう努力しました。

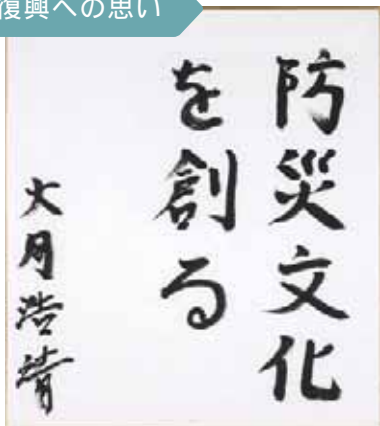


個人、地域、公の
三者が役割を果たし
災害文化を築く



いなべ市防災課 課長補佐
総務省災害マネジメント総括支援員
大月 浩靖 さん

復興への思い



三重県は対口支援団体として熊野町を支援し、多くの自治体職員、三重県庁の応援職員が来られました。大月さんは災害対策本部と支援担当として本部の運営や被災支援などを行っていただきました。

〔常に現場でマネジメントを行う〕

発災から2週間後に、三重県隊の第3班として熊野町に入り、熊本地震や九州北部豪雨などでのマネジメント支援の経験を活かして、災害対策本部の支援を担当しました。災害に関する業務は幅広く、今後どのような形で遂行していく必要があるのかをイメージしながらサポートするのが業務の必要なポイントです。災害対策本部の運営支援の他にも、避難所の環境整備、在宅避難をされている方への対応方法などのマネジメントを実施しました。特に在宅避難者への戸別訪問は応援職員全員が一致団結して支援ができたと思います。対策本部の支援するために担当職員の前に執務できる環境を整備していただき、担当職員に寄り添いながらサポートを実施しました。応援職員は別の部屋での執務を行うこともありますが、今まで被災地で活動した経験上、防災担当職員の困りごとを迅速に解決するためには、一番近くにいて寄り添いながらの支援が重要であると考えていたため、お願いをしました。

〔被災地職員のケアも大切〕

被災された方はもちろん、被災地自治体職員も初動、応急、復旧、復興に昼夜過酷な状態で働くことを余儀なくされています。被災地の自治体職員が倒れてしまえば、復旧、復興が進みません。そのため、職員が倒れないようにマネジメントするのも重要だと考えています。被災後は特定の人に業務が集中しがちです。職務の分散やプロジェクトチームを一時的に作り、偏る職務を平準化することが重要となります。熊野町ではそのようなことまでは時間的に厳しく対応はできなかったのですが、迅速かつ円滑に業務を進めるためにサポートをするのが支援者の役割の一つだと思います。

熊野町での経験をいなべ市広域受援計画にも反映し、いなべ市が被災した時に円滑に実施できるよう仕組みを作っていきたいと思います。

〔自助・共助・公助の大切さ〕

自治体の職員には異動がありますが、どんな部署に行っても必ず防災に係る仕事があります。職員のみなさんには、それぞれの持ち場で防災について学んでいく意識を持っていただきたいと思います。

同じことは地域住民の皆さんにも言えます。例えば、皆さんが当たり前前に1週間分の非常食を用意しているような「防災文化」を築いていくことができれば、発災時の対応もスムーズになると思います。「自助・共助・公助」とよく言われますが、個人は個人の役割、地域には地域の役割、公には公の役割があり、それぞれの役割を果たせないとスムーズに災害対応をすることができません。三者はそれぞれの役割を意識しながら、普段から生活を送ることが大切だと思っています。

災害対策のエキスパートとして、三重県隊第1班で熊野町に派遣された藤原さん。熊野町での経験を踏まえて、外部支援者が被災自治体でどのような手順で災害対応を実施しているのかをまとめ、令和2年の地域安全学会秋季研究発表会で論文奨励賞を受賞されました。

「生活再建のためのかじ取りを」

7月10日に新幹線で広島市に入り、車に乗り換えて熊野に向かったのですが、交通事情が悪くて引き返さざるを得ず、翌日早朝から出発して何とか到着することができました。当初は広島市に宿泊する予定でしたが、通うのは困難と判断して、急きょ「くまの・こども夢プラザ」を用意してもらい、三重県チーム10人が寝泊りすることになりました。役場に入ってみると、何か静かで落ち着いているように感じられました。職員の皆さんは、その時点で「救出・救助」や「避難所の運営」に精一杯で、次に必要な「生活再建」に向けた業務を開始できていなかったのだと思います。「生活再建」を進めるため、大きなかじ取りをすることが私の任務だと感じました。

「救出・救助」から「生活再建」への移行

「生活再建」に向けて、大切なのは具体的なイメージをつかむことです。まず、災害の規模感を災害対策本部で共有してほしいと考えて三重県チームで手分けして調査を行い、被害概要図を作成しました。これをもとに、「今何をしている」という対策状況だけでなく、「いつまでに」「どのような状態に」生活再建をするのか議論してもらいたいと考え、会議のフォーマットも作成しました。その後、役場の皆さんと罹災証明書の発行に向けたロードマップの作成、被害認定調査の実施手順などを整理しました。これにより、「救出・救助」から「生活再建」へと災害対策本部の意識を移すお手伝いができたのではと思います。

「熊野の人たちとの出会いは財産」

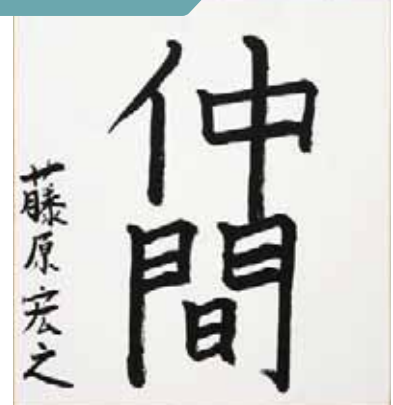
熊野町に滞在したのは10日ほどで、住民の方々と直接ふれあう機会は少なかったのですが、熊野の皆さんと一緒に災害に立ち向かった仲間だと今でも感じています。その後、町職員の方々には令和元年東日本台風の被災地で支援を行う際に、資料提供やアドバイスをいただきました。災害に対処するには、こうした「つながり」がとても大切だと思います。熊野の皆さんは自分のまちのことが好きで、災害においても役割分担を超えた連携ができていたことが素晴らしいと思います。今回の経験を語り継ぎ、被災経験を踏まえたまちづくりを目指していただければと思います。熊野町は、「平成30年7月豪雨」に立ち向かった自治体です。他地域が災害に遭った場合には、この経験を活かして被災自治体を積極的に支援していただけることを願っています。

経験を活かし、被災自治体を積極的に支援してもらえたら



伊勢市危機管理課 主事
総務省災害マネジメント支援員
藤原 宏之 さん

復興への思い



「豪雨災害で
試された
消防団の使命」



熊野町消防団 第八分団分団長
稲垣 寿計 さん



熊野町消防団 第八分団団員
池田 敏己 さん

「土石流に行く手を阻まれる」

7月6日は19時に避難勧告が出たので、団員が手分けして川角地区に避難を呼びかけました。19時半頃に大原ハイツに行き、道路は冠水していましたが大きな異常はなく、グリーントウンで避難を呼びかけてから他の地区に向かっていました。20時10分くらいに災害対策本部から「大原ハイツが大変なことになっている」という連絡があり、急いで引き返すと、進入路も裏の山道も土石流にやられて通れる状態ではありません。入り口では流された車がぶつかり合って引火し、家屋火災も発生して、2度のプロパンガス爆発が起きていました。中に入れないためポンプで放水するには遠く、周囲の家に水をかけて類焼を防ぐのが精一杯でした。団地の境にあるブロック塀を乗り越え、グリーントウンにも土石流が入ってきそうになったので、団員がハンマーで穴をあけ、土砂を横に流すようにしました。

「倒壊家屋から生存者を救出」

大原ハイツの方が重機を使って山道の土砂の撤去を始められたので、団員は重機のブームを伝って団地の中に入っていました。消火栓を開けて消火活動をし、とり残された人たちの捜索を始めました。民家のカーポートに30人ほどが集まっており、「この上にも怪我人がある」と聞き、上がっていくと「助けてくれ」と声がしました。男の人が倒れていて、「家の中にまだ妻や子どもがいる」と。家は倒壊し中に入れない状態なので、先にこの方を助け出すことにしました。足を切断されているようだったので、団員がベルトで止血をし、ベニヤ板や即席担架で救出しました。



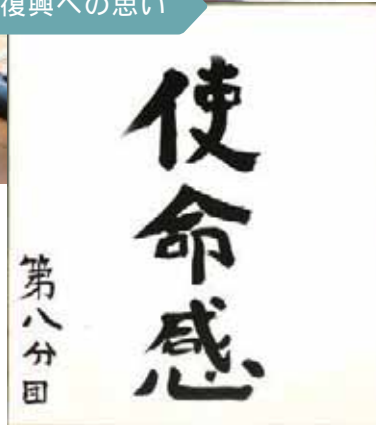
熊野町消防団 第八分団団員
丸井 泰昭さん

救助活動の現場

復興への思い



消防署や警察の人たちが到着できない中、土石流に襲われた大原ハイツで救助活動にあたる消防団。



熊野町消防団 第八分団団員
谷水 守さん

「暗闇と泥流の中、避難を誘導」

あたりは真っ暗で、巨石がゴロゴロしており、電柱も倒れて電線が垂れています。数人の団員がヘルメットに付けていた薄暗い照明だけが頼りです。胸までつかるような土砂に阻まれて前に進むことができなくなり、辺りにあった瓦や石を敷いて道を作り、何とか怪我人を下まで運ぶことができました。再び土石流が起こる危険性があるので、団地の全員に避難してもらわなければいけません。団員が手分けして一軒ずつ回り、最後に体が不自由な方を担架で運び終えた頃にはもう翌日の2時を越していたと思います。学校などを回って毛布や乾パンなどを集めて体育館に運び、朝の5時にとりあえず初日の任務を終了することができました。

「全員が責任者になった気概で」

発災の日には消防署や警察の人たちは、大原ハイツまで辿りつくことができませんでした。非常に危険な状況の中、2次災害が起こらなかったのは奇跡に近いと思います。町内すべての消防団が集まったので初対面の人も多く、お互いの顔も見えないような状態で、一人ひとりが日頃の仕事で培った知識を発揮し、全員が責任者になった気概で頑張ったんだと思います。みんなが声を掛け合って指示や提案をし、統率系統がない中でも統率が取れていました。

今回の豪雨災害で痛感したのは、とにかく早めの避難が大切だということ。自分の身を守る事を最優先して行動していただけると、私たちも人命救助に最善を尽くすことができると思います。

災害時の声かけを
円滑に行うため
コミュニティが必要



自治会長
藤田 孝明 さん

復興への思い



大原ハイツを含む川角地区の自治会長として、避難所での被災者支援に奔走した藤田さん。災害時の声かけをスムーズにするため、自主防災活動とコミュニティづくりにも取り組んでいます。

〔想定以上の災害が起こる〕

川角といっても、私の家は二河川の近くのなので、発災の日は10年に1度くらい起きていた川の氾濫を警戒していました。夜遅くに大原ハイツでたいへんなことが起きていると連絡があり、町民体育館で待っていると、零時頃に被災した人たちが一斉に避難してきました。大原ハイツは川角地区では一番危険があるという認識があり、避難訓練も大々的にやっていたのですが、土砂災害は想定以上のものでした。

翌日からすぐに自治会も避難所の運営に携わりましたが、何分大きな災害は初めてです。町、自治会、NPOの3者で話し合い、住民の安否確認から食事はどうするかなど、一つずつ対処していきました。被災者の把握には時間がかかり、行方不明者12人という数字が確定したのも発災から数日後だったと思います。

〔避難所で強まったつながり〕

最初は食事や生理用品など、あらゆるものが足りなかったし、避難生活が長くなると、さまざまな問題が出てきます。特に難しかったのがペットの問題で、ペットを連れている家族とそうでない家族をどのように住み分けさせるかには苦労しました。暑さも問題でした。体育館なので、扇風機やスポットクーラーではほとんど役に立ちません。大型エアコンが導入された時は本当に助かりました。

当初、避難所の運営は町と自治会で行っていましたが、掃除やゴミ出しなどは避難者に任せ、自治会の班ごとにやってもらうようにしました。こうしたこともあって、避難者同士のつながりは強まっていったと思います。

〔防災コミュニケーションを高める〕

大原ハイツでは、第一波の土石流が道をふさいでしまったことが住民の避難を困難にしました。ですから、共有地の問題などをクリアして、速やかに避難路を通したことは良かったと思います。後は大原ハイツとグリーンタウンに一時避難所を作ってもらえたらと思います。二河川が呉方面から逆流してくることがあるので、堰を設けるなど広域的な対応をしてもらいたい。

災害時の避難には近隣の声かけが欠かせません。しかし、団地では住んでいる人の関わりが薄いので、なかなかうまくいかない場合があります。今は防災意識と関わりが強まっていますが、これを薄めていけないよう自治会や老人クラブ、イベントなどを通して防災コミュニケーションを高めていけたらと思います。

川角自治会副会長として、避難所などで被災者の支援にあたった城後さん。発災時の経験と反省を踏まえて、「大原ハイツ自主防災会」を立ち上げ、防災・減災活動に取り組んでいます。

「悔やまれる連絡の躊躇」

7月6日は19時に避難勧告の知らせが来たので、避難所となっている小学校の体育館に行き、机を出して待機していました。同20分頃に急激に雨脚が強まりました。その時、電話で避難の指示をしようと思ったんですが、激しい雨の中を避難するのは大変だろうと考え、思いとどまったんです。そのことが今となっては悔やまれます。そうこうするうちにグリーンタウンの人が避難してきて、土砂災害が起こったことが分かり、大原ハイツの人たちに電話をかけまくったのですが、もう固定電話はつながらない状況でした。深夜になって、消防団の方から大原ハイツの人たちは町民体育館に避難していると連絡が入りました。

「避難所生活で住民の距離が縮まる」

翌朝、現場に行ってみて、何軒も土砂でつぶされていることをはじめて知りました。女の人がいて「下におばあちゃんがいる」と言われたのですが、手ぶらで入ったので何もすることができず、辛かったですね。大原ハイツの一番上まで上がってみると、何軒も家が流されていて、「こんなことが起こるんだ」と圧倒されました。私も大原ハイツに住んでいますが、知らない家庭も多かったので、体育館に来ていない人を地図でチェックし、被害状況の把握を急ぎました。自治会副会長として避難所では要望の取りまとめに努め、避難所が閉鎖されてからは大原ハイツの住民が今まで通りに暮らせるよう生活再建に取り組みました。体育館で2か月ほどみんな一緒に生活したので、団地の人たちの距離はかなり縮まり、つながりや絆は強まったと思います。

「一番大切なのはとにかく避難を促す」

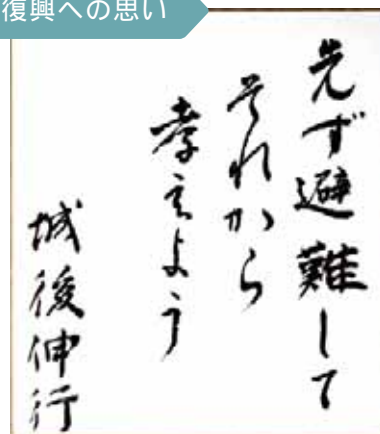
災害の後、「川角自治会防災会」とは別に、より小さな単位の「大原ハイツ自主防災会」を立ち上げ、避難経路を確定したりしましたが、一番大切なのはとにかく避難を促すことです。避難勧告が出た場合は、まず全員に電話で連絡、避難所の体育館に行って、来ていない人にはもう一度電話をします。一回連絡するだけではだめで、何回も徹底的にやっています。とりわけ一人暮らしの方の家には早めに連絡して、避難所に行く前に覗いてみるようにしています。災害から逃れるためには、みんなが早めに逃げること。それしかありません。「しつこい」と思われてもやっていく覚悟です。

「早めに逃げることに、
「しつこく」とも
それしかないです」



自治会副会長
大原ハイツ自主防災会代表
城後 伸行 さん

復興への思い



防災・減災のために 近隣の人たちとの 関係づくりが大切

いち早く川角自治会防災会を立ち上げ、夜間避難訓練の実施などに取り組んでこられた田中さん。次の世代にも伝えられるよう「平成30年7月豪雨災害」の記録の収集・保存に努め、災害検証委員会の委員として検証報告書の作成に取り組んでこられました。

「山は逃げないので、常に危険がある」

平成11年(1999)に三石山で土砂崩れがありました。住居への被害はなかったが、町民グラウンドへたくさんの土砂が流れ込んだのです。山は逃げていかないですから、土砂崩れの可能性は常に考えておかなければいけない。その頃から、大原ハイツ周辺で起きたら一番被害が大きくなると危惧しており、平成26年(2014)に「川角自治会防災会」を立ち上げました。その直後に安佐北区や安佐南区で大規模な土砂災害が発生したこともあり、平成27年(2015)年に大原ハイツの住民などを対象に大掛かりな夜間避難訓練を実施しました。グリーントウンの公園に逃げ、町からの避難バスを待つなど、避難経路も想定。しかし、平成30年(2018)の豪雨災害では土石流が避難道まで瞬時に流れ込んできたため、逃げようがなくなってしまいました。

「記録を残して検証する」

発災の日、19時に避難勧告が出ると自治会の班長に電話連絡をしましたが、その時点ではもう各戸を回って避難を呼びかけるような状況ではありませんでした。大原ハイツでは速やかに避難した人も多かったですが、土石流が凄過ぎて、多くの犠牲者を出してしまいました。もう少しきめ細かに避難の指針を決め、住民の皆さんの「自助」に対する認識を高めていなかったことが悔やまれました。

災害が起こってから取り組んだのは、記録を残して検証すること。被害現場の状況を細かく調べて課題をあぶり出しました。そうして、平成31年(2019)4月に災害の記録とより細かな避難経路と身近な避難所をまとめた新しい地図を住民の方々に配布しました。なお、災害記録は、川角自治会館で保管し、自由に閲覧できます。

「家族ごとに避難マニュアルをつくる」

この地図をもとに、まずどこに逃げるか、外に出ている人はどのように合流するかなどを家族で話し合っ、家族ごとの避難マニュアルをつくり、毎年更新してもらうことです。一般的な話ではなく、自分の家族のこととして考えて、自主防災の意識をもってもらいたいですね。もう一つ重要なことが災害弱者への対応です。一人では逃げられない人がどこにいるのかを把握し、車などを出せる人と橋渡しをして、避難訓練をやっておかなければいけません。そのためには、みんながまず近隣の人を知って、何かあったら声をかけられるような関係を築いておくことが大切です。防災・減災を進めていくためには、「自助」だけでなく、「近助」が欠かせないと思います。



前・川角自治会防災会代表
田中 久也 さん

復興への思い



小川さんは被災後、住民主体で立ち上げた「大原ハイツ復興の会」の代表として、避難マップの作成や訓練の実施、花壇の設置など、団地を再生させる活動を進めています。

「横道にそれ、間一髪で助かる」

発災の日には妻と孫の3人で自宅にいました。20時頃に土石流の第一波が家のすぐ横を流れて行き、「これは危ない」と何も持たずに車で逃げたのですが、土砂に阻まれた車が列をなしており、前に進むことができません。横に民家に通じる道があったので、とりあえず入ったところ、さっきまで自分たちがいた道に土石流の第二波が来たのです。間一髪で命は助かりましたが、身動きが取れません。その後23時半くらいに消防団の人たちが道を開いて入ってきて大原ハイツから何とか脱出でき、町民体育館に避難しました。

避難所では地元の女性会の人たちによる食事の提供をはじめ、自衛隊の入浴支援、阿戸町のパン屋の方が毎朝無償でパンを届けてくれたり、東広島のホテルが子どもたちにプールを使わせてくれたり、さまざまな方からの言い尽くせないほどのご支援に、心から感謝しています。

「防災のためにできることをしよう」

復興を目指す会の構想は避難所で交流を深めた住民の間で生まれました。本格的な復興が始まる前に住民の声を取り入れてもらいたいと思い、住民にアンケートを行って、急を要する項目をピックアップし、町に提出しました。そして、10月に住民組織として「大原ハイツ復興の会」を結成したのです。会の主な目的は2つあります。一つは、住民の防災意識を高めること。まず、防災士さんの支援のもと、広島大学の先生などを招いて5回の「防災勉強会」を開きました。災害のメカニズムなどを学び、避難路、避難途中の危険な箇所、緊急に避難できる所などを調べて、避難マップを制作しました。家族構成や立地条件に合わせて、どの時点で準備をし、どの時点で避難するか「マイタイムライン」を家族ごとに決めておいていただければと思います。

「思いを込め、ひまわりの種を飛ばしたい」

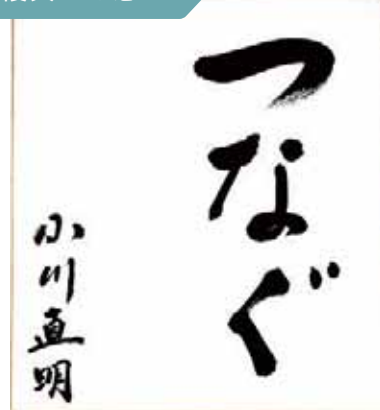
もう一つの目的が、荒れた状態だった団地を花で飾ることです。住宅跡地や道路脇に花壇を作り、パンジーを植えるなど、同級生をなくした中学生たちも手伝ってくれて、第一回の「団地を花で飾る活動」がスタートしました。一周忌を迎える7月6日にひまわりを咲かせたいと4月末に種をまき、「慰霊の集い」に間にあわせることができました。今年の「慰霊の集い」ではひまわりの種を風船に付けて、子どもたちのメッセージと一緒に、メビウスの歌う「赤い風船」に合わせて、空へ飛ばそうと思っています。これからも地域のつながりを強め、人と人をつなぎ、記憶をつなぎ、防災に対する思いをつなぐ活動を続けたいですね。

人と人をつなぎ、
記憶をつなぎ、防災
への思いをつなぐ



大原ハイツ復興の会代表
小川 直明 さん

復興への思い



窓を開けたとたんに
山が崩れはじめ、
身動きがとれず……



被災者

桐岡 幸恵 さん

復興への思い



大原ハイツの自宅が土石流に襲われ、ご主人を亡くして、ご自身も重傷を負われた桐岡さん。今も花壇の世話などで団地に通い続け、追悼式典では遺族代表として言葉を述べられました。

「考えてもみなかった土石流」

7月6日は夕方から雨の量が急に増えて、防災アラームが頻繁になるようになり、これは普通じゃないと思いました。家の前の水路が道路を越えて玄関まで水が入って来ていました。2階に上がって窓から外を見ようとしたら、開けたとたんに山が崩れ始めました。私は階段の踊り場で動けなくなったのですが、前の家に土石流が当たって波しぶきが上がり、電線が切れて光ったのが見えました。家が浸水することがあっても、土石流が起こるなんて考えてもみませんでした。下に降りようとしても、いろんなものが体に乗っかっていて動きません。しばらくすると、お隣のご家族がガラスを壊して入ってきて、体に乗った冷蔵庫を除けて助け出してくれたんです。お腹がとても熱く、怪我をしているようでした。消防団の人たちが土砂に足を取られながらも、町民体育館まで運んでくれ、そこから病院に搬送されました。

「亡き主人が引き合わせた縁」

土石流が入って来た時、主人は1階でカーブ対巨人戦を見ていました。熱心な巨人ファンで、巨人が負けているとテレビ観戦をやめて2階に上がってしまうんですが、その日は徐々に巨人がカーブに勝っていたんです。階段の踊り場で倒れた時、どんな状況が分からなかったのですが、何ともしに「主人はもうダメだ」と思いました。自分も助かるとは思わなかったですけど。

巨石がかぶさっていたため主人の遺体が発見されるまで、1週間ほどかかりました。息子が離婚したため疎遠になっていた孫が、仕事を休んで駆けつけてきて、毎日捜索に加わってくれました。その後も私のところを良く訪ねてきてくれるようになり、主人が引き合わせてくれたような気がします。

「歳月を経るごとの寂しさ」

私は今大原ハイツを離れて、町内の別の場所で暮らしています。主人は生きている間自分の好きにしてきたので悔いはないだろうと思いい、当初はあまり悲しさを感じなかったんですが、歳月が経つごとに寂しさがつってきますね。みんなで花壇を築いて花を植え、季節の野菜もつくっているの、毎日のように大原ハイツには足を運んでいます。災害にあって思うのは、ちょっとでも危険を感じたら早めに避難するということです。近所同士の声の掛け合いも大切だと思いますね。災害を経て、人の絆の大切さを深く感じるようになりました。これからは、みんなで心一つにすることができたらと思います。

入浴支援、瓦礫や危険物の除去、道路の砂塵防止など、全国の自衛隊から災害支援を受けました。中でも、過酷な人命救助や行方不明者の捜索に取り組まれたのが海田駐屯地の第46普通科連隊の皆さんです。

「炎天下での過酷な作業」

土砂災害発生の知らせから約50人に非常呼集、7月7日の早朝4時に駐屯地を出発し、渋滞の中を進んで5時30分頃、町民グラウンドに到着。まず、中隊長らが消防団の人たちと山側から被災地に入って状況を確認し、大原ハイツにとり残された方々を誘導して避難させました。その後、行方不明者の捜索を始めたのですが、たくさんの家が倒壊していたため作業は難航、役場の人たちから住民の情報を聞いて当たりをつけ、当初はすべて人力で、施設隊の重機が入ってから手作業を中心に捜索を進めていましたが、連日40近い炎天下のため、過酷な作業となり、人員配分に気をつけても、体調不良者が出てしまいました。捜索に立ち会うご家族や近隣の方々も心労と体の疲れで非常に憔悴しておられ、見ていてこちらも辛かったです。何とかして探し出さなければいけないという使命感も強まりました。

「警察、消防、行政と綿密に連携」

7月16日に最後の行方不明者が見つかり、私たちの熊野町での任務は終了しました。引き続き自衛隊が瓦礫や危険物の除去、入浴支援などを行わせてもらいましたが、人力での人命救助が私たちの任務のため、続いて矢野や瀬野(広島市安芸区)などの現場に向かいました。

熊野町の現場では、警察や消防と作戦会議を開き、綿密な連携のもと作業を行いました。当初は行方不明者の情報も錯綜していたのですが、役場の方から最新の情報をすぐに提供していただいたので、作戦もスムーズに立てることができました。また、倒壊した建物でも除去するためには所有者の許可が必要なのですが、役場の方にしっかり確認を取ってもらい、たいへん助かりました。地域の方々からもあたたかい声をかけていただき、とても励みになりました。

「速やかな避難こそ一番の対策」

西日本豪雨は広い範囲に及んだ災害で、道路の被害も多かったため、綿密に情報収集をして作戦を立てる必要があり、各地の自衛隊の協力が必要な大規模な災害派遣となりました。生命をかけた現場を経験したことは、若い隊員たちにとって今後も自衛隊勤務を続けていく上で大きな財産になったと思います。人命救助に必要なことはスピードです。できるだけ早く現場に行き、状況を確認して作戦を考える必要があります。人の命を守るのもまたスピードです。警報が出たらできるだけ早く避難するよう心がけてください。防災・減災にはそれが一番の対策だと思います。

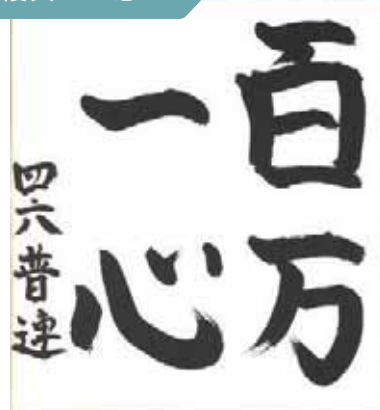
地域の皆さんの
あたたかい声が
災害派遣に励みに



陸上自衛隊 第46普通科連隊

三井 智寛さん
平山 栄一さん
桑原 隆道さん

復興への思い



川角地区の皆さんの 災害へ向き合う姿に 感銘を受けました

町が設置した「平成30年7月豪雨」災害検証委員会の委員長として、検証報告書を取りまとめられた土田先生。その後、大原ハイツに土石流発生検知センサーを設置、防災・減災の取り組みを続けられています。

「研究人生の中でも大きな出来事」

7月6日は学会の研究発表のため金沢に出張しており、ニュースで西日本で大雨であることを知りましたが、たいへんな災害が起きたことを知ったのは翌7日の朝です。8日朝、新幹線で広島に向かいましたが、東広島駅に降りると駅前の道路はたいへんな混雑でタクシーも乗れそうにありません。学生に連絡して車を出してもらい何とか自宅にたどり着きました。自宅は中川という小河川に面しているのですが幸い無事でした。後にお隣の方から6日の中川の写真を見せてもらいましたが、あと少しで越流という状態であったことがわかりました。自宅到着後に車で災害状況を調べようとしたのですが、道路がいたるところで寸断されており、大学のキャンパスを含めて街中が大きな被害を受けていることに呆然としました。災害調査を数多く行ってきましたが、自分の住んでいる場所が被災地となったのは初めてでした。10日に工学、医学、理学、心理学など関連する分野の研究者が集まり、越智学長を団長とする豪雨災害の調査団が発足しました。これも広島大学の長い歴史の中で初めてのことです。

「今までになかった多くの巨礫による被災」

川角地区大原ハイツの被害現場を見て、巨礫を含む土砂流出の規模と被害の大きさに驚きました。特に、早い速度で巨礫が住宅をかすめて壊れたと思われる住宅が多数あったことはあまり見たことがなく、強く印象に残りました。土石流による被害予測は流出土砂の量を中心に検討されていますが、巨礫の混合比率など粒度特性に関する情報も必要であることを痛感しました。

災害検証委員会の委員長を務めさせていただきましたが、発災時の状況の把握、避難勧告の判断、発災後の対応など、町役場の危機管理が適切にできていたのかを自主防災組織の方々の体験談を伺いながら検証していきました。時間が経つと発災時の大切な経験・情報が忘れられてしまう場合があります。検証を通じてこれらをしっかり記録に残せたことの意義は大きいと思います。また、避難のタイミングや避難所の安全性など、今後の同規模の災害が起きた場合の改善点に対応マニュアルに反映させることができました。



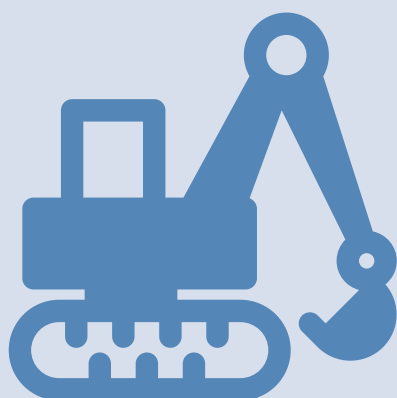
「平成30年7月豪雨」
災害検証委員会委員長
広島大学名誉教授

土田 孝さん

「土石流検知システムの実用化に取り組む」

2018年当初、私は定年退職間際ということもあり、新しいことよりこれまでの研究をまとめる時期、と思っていました。しかし、未曾有の災害を体験し、どうしても取り組みたい新たな課題がみえてきました。2019年12月から大原ハイツ山側の溪流内に土石流センサーを設置して観測を開始し、降雨時の地盤の変位から土石流の発生を検知するシステムの検証実験を行っています。設置にあたっては、川角大原ハイツ自主防災会、大原ハイツ復興の会の皆様にたいへんお世話になりました。町役場からも土地所有者の方々の理解を取っていただくなど多大な支援をいただきました。大原ハイツの方々が地域を安全にするために取り組んでいるさまざまな活動を紹介いただき、たいへん勉強になりました。住宅地の安全監視を目的とした土石流センサーの継続観測は全国でもおそらく初めてであり学会やマスコミから関心が寄せられています。コロナ禍の影響でできていなかった住民の皆様との観測結果の報告検討会を今後実施したいと考えていますので、引き続きご支援とご協力をお願いします。

第4部



復旧の状況と町の将来

第6次熊野町総合計画（令和3年(2021)3月策定）

計画策定の趣旨

昨今のわが国の社会経済情勢における少子高齢化や人口減少の急速な進行による人口構成の変化、自然災害や新たな感染症など様々なリスクに対する危機管理体制の強化など、本町を取り巻く環境は、大きく変化しています。

このような厳しい環境の中、本町においても、さらに自立し、持続的な発展が可能となるよう町民と行政との協力や役割分担による協働と連携の方策を探り、大きく変わりつつある時代にふさわしい本町の変革を図ることが重要となっています。

本計画は、目指すべき本町の将来像を描き、その実現に向けて実施する施策や事業の体系を示すものです。

施策の体系

総合計画

基本構想

将来像 ひと まち 育む 筆の都 熊野 ~なんかいい ちょうどいい そう想えるまちを目指して~

町民との共生による信頼と連携を基本に持続的なまちづくりを進めることで、「なんかいいことが多いまち」「私たちの暮らしにちょうどいいまち」を実現します。

町民同士がつながり、周りの「まち」とつながり、世界の「ひと」とつながることで、さらなる「なんかいい」「ちょうどいい」そう想える「熊野」を目指します。

土地利用の方向

人口ビジョン

基本目標

基本計画

重点戦略

(総合戦略)

- 1 誰もが元気で健やかに暮らせるまち
- 2 学ぶ力と豊かな心を育むまち
- 3 活力と魅力に満ちた元気なまち
- 4 安心・安全で快適に暮らせるまち
- 5 人と自然が調和する美しいまち
- 6 自立と協働 みんなで創る持続可能なまち

1 豊かな人づくり

2 暮らしの安心・安全づくり

3 協働の地域づくり

4 確かな地域ブランドづくり

5 本町における Society 5.0 社会の実現

実施計画(別途作成)

毎年、5年先までの事業内容を策定

「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を総合計画における基本計画の重点戦略として位置づけ、基本計画と共通の指標を定め、人口減少施策や地方創生に関する施策を一体的に推進していきます。

重点戦略

平成30年7月豪雨では本町も大きな被害があったことから、まちの復旧・復興を進めるとともに、災害による犠牲者を再び出さないよう防災・減災に重点的に取り組む必要があります。町民それぞれが命と暮らしを守るための知識や行動を身につけられるよう、必要な施策を講じていきます。

重点目標達成指標(KGI)

指標名	現状値(令和元年)	目標(令和7年)
自主防災組織の組織率	23.8%	50%以上
防災教育への取組の満足度	28.8%	40%以上
地震・風水害などの防災・減災対策の満足度	28.1%	40%以上

基本目標4 安心・安全で快適に暮らせるまち

頻発する大規模自然災害に対し、町民の身体や生命、財産を守るため、防災・減災対策に取り組むとともに、町民との協働のもと、地域防災力や防災機能の向上を図ります。また、犯罪や交通事故が発生しにくい環境づくりを進めるとともに、交通体系の維持・向上や交通サービスの充実を図り、安心・安全で快適に暮らせるまちづくりを進めます。



基本施策1 防災・減災対策の強化

「熊野町災害復興計画」や「熊野町国土強靱化地域計画」に基づく総合的な防災体制の強化に努め、災害に強い町づくりを推進します。また、自助・共助を基本に町民の防災意識を高め、緊急時に適切な対応がとれるよう地域防災力の向上を図ります。さらに、避難情報の迅速な発令や多様な避難場所の確保、被災者支援体制の構築など、災害応急体制の整備に努めます。

具体的施策

- 1 総合的な防災体制の確立
- 2 防災意識の高揚
- 3 地域防災力の向上
- 4 災害応急体制の整備

まちづくり指標(KPI)

指標名	現状値 (令和元年)	目標値	
		(令和7年)	(令和12年)
自主防災組織数	14組織	20組織	25組織
防災・避難訓練の実施回数	3回	10回	10回

基本施策2 砂防・治山・治水の推進

二河川や熊野川などの河川の浚渫や改修を推進し、治水機能の維持及び向上に努めます。また、森林の水源涵養機能や災害防止機能などを保持するため、遊歩道の管理、間伐、植樹などに努めるとともに、砂防・治山施設整備計画の実施を推進し、土砂災害対策に取り組みます。

浚渫：河川内に堆積した土砂を取り除くこと
 水源涵養機能：山林が、降水を貯留し、河川の流量を安定させる機能

具体的施策 1 自然災害対策の充実

まちづくり指標(KPI)

指標名	現状値 (令和元年)	目標値	
		(令和7年)	(令和12年)
砂防・治山施設整備箇所数	4箇所	32箇所	37箇所

基本施策3 消防・救急体制の充実

啓発活動を充実し、防火意識の高揚を図ります。また、広域消防体制を維持しつつ、地域における消防力の強化を推進するため、消防設備更新計画に基づき、消防団の消防資機材の維持管理に努めます。さらに、消防団員の確保にあつては、勤務先等へ消防団活動への理解を促進し、団員が活動しやすい環境を整備します。

具体的施策 1 消防・救急体制の充実・強化 2 消防団活動の推進

まちづくり指標(KPI)

指標名	現状値 (令和元年)	目標値	
		(令和7年)	(令和12年)
消防団協力事業所数	4事業所	6事業所	8事業所
火災件数	12件	5件	3件

基本施策4 道路交通網の整備・充実

主要幹線道路等の計画的な整備や生活道路の改良などを進め、渋滞の緩和や避難路の整備に努めます。また、歩道の新設・拡幅、段差の解消、通学路の安全対策など、安全で人にやさしい道路や歩行者空間の整備を推進します。さらにバス路線の維持や生活福祉交通「おでかけ号」の運行など利便性の向上に努めます。

具体的施策 1 道路の整備・充実 2 道路の維持管理・安全対策の推進 3 公共交通の整備

まちづくり指標(KPI)

指標名	現状値 (令和元年)	目標値	
		(令和7年)	(令和12年)
町道における車道の改良箇所数	11箇所	20箇所	25箇所
おでかけ号年間利用者数	8,540人	8,540人	8,540人

熊野町都市計画マスタープラン（令和3年(2021)3月策定）

都市計画マスタープランは、土地利用や道路、公園、下水道等の整備、自然環境の保全など、長期的な視点に立った将来像やまちづくりの方向性を総合的に示す計画です。

本計画では、都市計画の観点、インフラやハード整備を推進・促進するにあたり、町民とまちづくりの共通ビジョンを描き、上位計画の将来像の実現に向け、将来都市像を設定します。

将来都市像を具現化する5つの目標

将来都市像

筆にのせて 未来を描く まちづくり

目標1：安心・安全で快適に暮らせるまちづくり

目標2：コンパクト+ネットワーク型のまちづくり

目標3：活力・魅力満ちあふれるまちづくり

目標4：人と自然が調和する美しいまちづくり

目標5：住民主体のまちづくり

熊野町地域防災計画（令和2年(2021)2月修正）

本計画は、災害対策基本法に基づいて、町土並びに町民の生命、身体及び財産を災害から保護するために、町や県など、防災関係機関が処理すべき事務または業務の大綱を定めたものです。また、町民の役割を明らかにし、各種災害対策を迅速、的確、総合的に実施することにより、町民の生命、身体及び財産を災害から保護することを目的としています。

災害予防計画

この計画は、災害を未然に防止するとともに、災害発生時における応急措置等を迅速かつ的確に実施するため、災害予防責任者(指定行政機関の長、地方公共団体の長等)の行うべき業務の大綱及び相互の連絡調整について定めています。

災害復旧計画

災害に対する応急対策を行った後において、被災者の生活の安定、生業の維持、回復及び被害を受けた施設の復旧及びこれに要する資金等について必要な事項を定め、災害復旧の迅速かつ完全な実施を図ることを目的としています。

災害応急対策計画

災害が発生した、または発生のおそれがある場合に、その災害発生の防御及び拡大防止について迅速かつ実効ある措置を期するため、災害応急対策責任者(町長、知事、その他執行機関等)の業務と相互の連絡調整について定めています。

その内容は、災害発生直前・発生後の応急対策、災害派遣・広域的な応援体制、救助・救急医療及び消化活動など14項目に及んでいます。

熊野町災害復興計画 (令和元年(2019)9月策定)

計画の理念(将来像)

「平成30年7月豪雨災害からの復興に関するアンケート調査」では、熊野町の誇りに思うこととして「熊野筆のブランド力」が挙げられ、将来を見据えて復興を進めていく上で重視すべきことに「自然災害への対応力の充実」を望む声が多く上げられています。

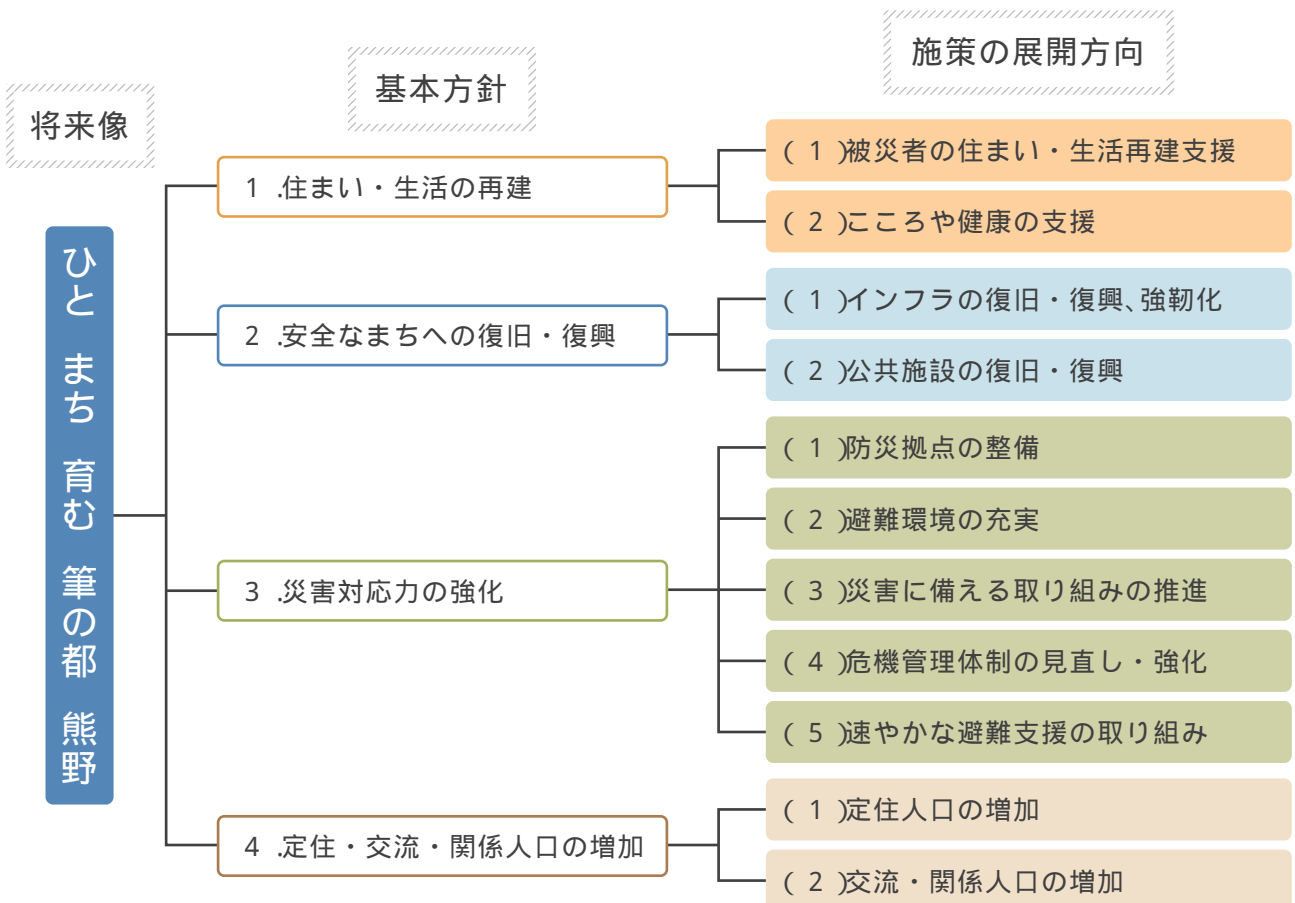
引き続き被災された方々に寄り添い、復旧・復興を着実かつ迅速に進めていくことが必要ですが、災害からの復旧・復興を単なる原状回復に留めることなく、「第5次熊野町総合計画」における将来像「ひとまち育む筆の都熊野」の実現や「人口減少への対応や筆の都としての地域ブランド力の強化等の被災前からの課題解決」に向け、創造的復興のまちづくりを進めていきます。

【熊野町災害復興計画の将来像 = 第5次熊野町総合計画の将来像】
ひとまち育む筆の都熊野

第6次熊野町総合計画においても本将来像は継承しています。

計画の基本方針(施策の体系)

災害復興に向けた4つの基本方針を定め、基本方針に基づいた施策を体系的に展開することで将来像を実現します。



住まい・生活の再建

被災者にとって、一日も早い住まいと生活の再建が必要不可欠です。そのため、各種制度に基づいて用意されている住まいや生活の再建支援の取り組みを被災者が適切に活用することができるよう、丁寧な情報提供ときめ細かな相談対応を行ってきました。特に被害が大きかった大原ハイツの再生について、安全な「住まいの場」へと再生する取り組みを住民とともに進めていきます。また、被災者に寄り添いながら、こころのケアや健康の維持・回復のための支援にも取り組みます。

被災者の住まい・生活再建支援

宅地内の堆積土砂の撤去や産業廃棄物の処理を速やかに行い、半壊以上の建物について撤去支援を実施。
農地の堆積土砂を撤去し、農道、ため池などを復旧。
被災者台帳を活用し、各種支援策の情報提供。
支援策を整理した冊子を作成配布し、相談会を開催。
被災した住宅の応急修理。
仮設住宅の提供。
公営住宅への優先的入居。
町税や県税の減免、猶予や各種保険料の減免、免除等による負担軽減。
生活再建を支援する義援金の支払い。

こころや健康の支援

県のスクールカウンセラー派遣制度を活用し、被災した児童、生徒等の心のケアのため、カウンセリングや教職員、保護者への助言等の実施。
被災直後から、公衆衛生チームの活動として、避難所での健康管理や自宅滞在者、みなし仮設及び公営住宅等入居者への家庭訪問による健康状況と要支援者の把握、支援。
被災者の生活再建と自立を支援するため「地域支え合いセンター」を開設し、見守り、生活支援、地域交流、疾病・介護予防等の促進を図るとともに、関係機関と連携し、総合的な支援体制を構築。

安全なまちへの復旧・復興

平成30年7月豪雨では、道路や河川をはじめ、各種インフラや公共施設も大きな被害を受けました。今後も、様々な自然災害が発生する恐れがあり、それに備えた安全性の追求は最重要課題となっています。また、平成30年7月豪雨では、県沿岸部の幹線道路が通行できなくなったことから、迂回交通が本町に集中したことで慢性的な渋滞が発生しました。本町の広域的な位置を踏まえた広域道路ネットワークの強靱化にも取り組んでいく必要があります。国や県などの関係機関とも十分に連携しながら、各種インフラ施設や公共施設のさらなる機能強化を図るための取り組みを進めていきます。特に本町の地形特性から、住まいの安全性を確保する上で重要な砂防・治山施設の早期整備とその適切な管理を国・県に要請していきます。また、減災の観点から、施設の整備と合わせてソフト的な施策も組み込み、各地区での避難環境を高める取り組みも進め、安全なまちに向けて復旧・復興を進めていきます。

インフラの復旧・復興、強靱化

土木施設、農業用施設、林道等の早期復旧。
県道を整備し広域幹線道路ネットワーク強靱化を推進。
優先度の高い路線や区間から町道を新設する。
啓開ネットワーク上重要な路線、区間の町道改良。
国や県が実施する砂防施設や治山施設、急傾斜対策事業の早期事業化と完成。
出来庭の慶神橋復旧に伴う配水管の布設替え。
復旧・復興事業の進捗情報をホームページ等で公開。

公共施設の復旧・復興

避難所となる公共施設の避難時の生活環境を高めるため、トイレの洋式化等の施設整備。
熊野第二小学校プールに続き、町民グラウンド及び多目的グラウンドの早期復旧。
被災した公園・緑地の復旧。
「ひろしまの森づくり事業交付金」を活用し、地元と一体となった、ゆるぎ観音周辺の復旧。
崩壊した林地の復旧を進め、崩壊防止対策を実施。

災害対応力の強化

想定を超えた豪雨災害は、町が備えていた対応力を超えるものとなりました。避難施設や避難路の配置、避難生活に必要な施設整備の状況、防災備蓄の量と質は必ずしも十分とはいえず、町民の皆さんには不便な避難生活をお願いすることとなりました。

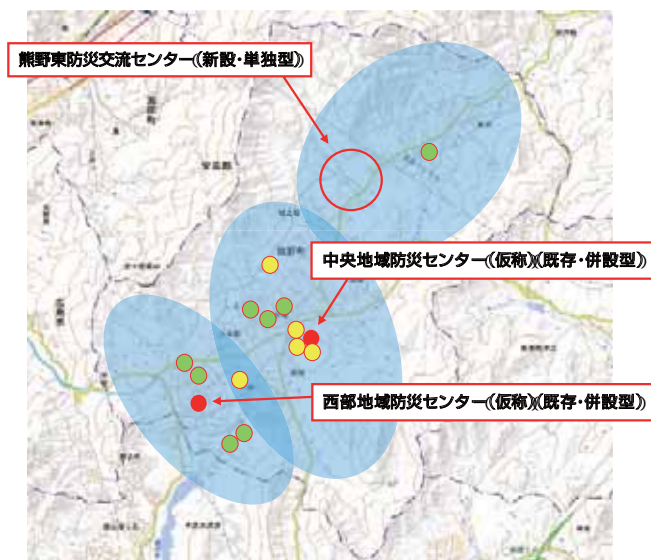
これらの反省や問題点をふまえ、今後の災害に備えて国や県とも連携しながら必要なハード整備に取り組むとともに、町民にも避難意識の向上や防災知識等の習得、さらには地域での災害対応力を高めていただくことを支援するソフト的な取り組みの充実を図ります。

また、避難情報の提供方法や、避難所開設等における町の災害対応体制にも改善すべき点があります。その内容を明らかにしたうえで、町の災害緊急時の危機管理体制についても見直しを図り、自助・共助・公助が調和した災害対応力を構築します。

防災拠点の整備

町内に防災拠点をバランスよく配置していく防災拠点施設整備構想に基づき、熊野東防災交流センターを整備しています。乳幼児世帯やペット同行者の避難にも対応でき、シャワー施設、備蓄倉庫も整備します。また、自主防災組織、消防団等の活動を支援する拠点施設としての役割も持たせます。

熊野東防災交流センターは、平時から防災教育・自主防災組織の活動などを行い、地域コミュニティを活性化することで、共助の向上を図ることを目的として熊野町初神に建設中で、令和3年6月オープンの予定です。非常時には、緊急指定避難場所として500人収容できます。指定避難所として160人収容可能です。



熊野東防災交流センター

避難環境の整備

指定避難所への道路を整備し、高齢者や障害を持つ方の避難支援策にも取り組みます。また、長期間の避難に必要な物資の備蓄やペット同行での避難等を含む運営マニュアルを充実させます。

危機管理体制の見直し・強化

危機管理体制強化の視点に立って地域防災計画を見直し、業務継続計画を策定し、迅速な情報伝達の仕組みも構築します。また、近隣、広域の自治体、企業や地域等との緊密な連携を図り、災害時の応援協定の締結を進めます。



三重県熊野市との災害時相互応援協定締結式

災害に備える取り組みの推進

自主防災組織を育成・支援するとともに、町と町民との協働による防災・減災対策を推進します。また、大規模自然災害に備えた強靱な地域づくりに取り組みます。

追悼式の開催

平成30年7月豪雨の犠牲者の御霊を弔うとともに、町の復興に向けた決意を表すため、追悼式を開催しています。



平成30年7月豪雨犠牲者追悼式

速やかな避難支援の取り組み

避難路整備事業

指定避難所や指定緊急避難場所等の避難先などへの複数の避難経路が確保され、安全な避難が可能となるよう、道路の整備を進めています。

大原ハイツ避難路は平成30年7月31日に造成を開始し、令和元年6月24日に開通しました。



平成30年7月31日
大原仮設避難路造成開始



開通した避難路
(本設道路)

防災行政無線デジタル化

自然災害や非常事態に対する避難情報の伝達手段のひとつである、防災行政無線のデジタル化整備を行いました。これにより、無線放送だけでなく、ワンオペレーションにより登録制メールや自動電話、FAXなど複数のメディアでの情報伝達が可能となりました。



防災通信室



増設・デジタル化した
屋外スピーカー

熊野町出身著名人

3組の復興支援活動

フリーアナウンサー

広島生まれ。広島県立女子大学卒業後、ラジオ福島でアナウンサー経験を積み独立。2003年より、広島でフリーアナウンサーとして活動。TVリポーターや、広島FMで「Over the Rainbow」などのワイド番組、経済番組「Chunk！」のメインパーソナリティを務める。2012年にイメージコンサルタントの資格を取得し、現在は企業研修や個人コンサルティングも行っている。



徳永真紀さん
Maki Tokunaga

イラストレーター

キャラクターデザイン、イラスト、漫画で雑誌、広告等で活動中。主な仕事に学研「ピチレモン」、森永乳業「練乳いちごヨーグルト」など、著書に絵本『悪魔の尻』（如月出版）がある。被災地の復興支援活動を漫画家やクリエイターに呼びかけ、「西日本豪雨復興支援アート展」を2019年1月より開始、西日本豪雨復興支援チャリティートートブックとして2020年7月に発売された。



むかいあぐるさん
Aguru Mukai

Profile

シンガー

岡田真実(左:Mami)、岡田賀江(右:Norie)による姉妹デュオ。

2008年にメジャーデビュー。JA共済広島、エースJTB、広島トヨタなど、これまで20本を超えるCMソングやテーマソングを手がけ歌っている。どこか切なく、優しく包み込むような姉妹ならではのハーモニーは人々の心にずっと寄り添っていく。



Mebius

メビウス

岡田真実さん(左:Mami) 岡田賀江さん(右:Norie)

イラストや漫画、キャラクターデザインなど多方面に活躍するむかいさんは、漫画やアニメ、イラストやファッションなど各界で活躍するクリエイターの作品を集め、「西日本豪雨被災地復興アート展」を企画。被災地の人たちに感動を与えました。

イラストレーター

むかいあぐるさん

Aguru Mukai

復興への思い



「ふるさとの惨状に
涙が止まらない」

私は熊野町の出身で、地元のために何かをしたいと強く思っていました。そんな折、「平成30年7月豪雨」が起き、大きなショック受け、毎日泣きながらテレビに釘付けになりました。多くのボランティアの方を見て、自分にも何かできることがあるはずだと思いました。そして、呉市出身のライトノベル作家、東きゆうさんと被災地に元気を与え、全国に復興をアピールできるようなチャリティ・アート展を企画しました。

「思いあふれる作品が
集まる」

友人や先輩を中心に、おつきあいのなかった著名な方にも、被災地の方を元気づける作品の提供をお願いしました。皆さんお忙しい中、温かい作品を作っていただけで胸があつくなりました。アート展はまず呉市で開催、令和元年の6月から9月にかけて、筆の里工房で展示。たくさんの方が訪れられ、お年寄りの方が

「被災地の人たちに、アートで
あたたかい気持ちを届けたい」

「こんな形の災害支援もあるのか」と喜んでおられたのが印象に残りました。多くの方に「ありがとう」と言っていたら、本当に良かったと思います。

「熊野をアートのまち
にできれば」

作品展示後は応援メッセージとともに『西日本豪雨復興応援チャリティアートブック』として広島出版社から発行しました。災害への備えや被災した場合の対応についての記事も掲載しているので、アートを楽しみつつ、防災・減災に役立ててほしいと思います。熊野は日本一の筆のまちで、私のように絵を描く人間にとってとても誇らしいことです。アートのまちとして世界に発信できれば、子どもたちの夢も広がっていくはず。私もアートを通して、少しでも故郷に貢献できたらと願っています。

「ラジオは心のメディア」を信条にフリーアナウンサーとして活躍する徳永さん。「くまのちょうさいがiefem」への出演、町制施行100周年記念式典や復興支援チャリティライブの司会など、豪雨災害の後も故郷を元気づける活動を続けています。

フリーアナウンサー

徳永真紀さん
Maki Tokunaga

復興への思い



「慣れ親しんだ景色が
変わる衝撃」

私は今、三次市で暮らしていますが、熊野は無条件で愛している故郷です。発災直後は情報も乏しく、高校の同級生とLINEグループを立ち上げて情報を共有しながら、不安な日々を送っていました。ようやく帰れた時は、慣れ親しんできた景色が水害で大きく変わったことに衝撃を受けました。熊野は子どもの頃から安心できる場所だと感じていたので、災害の恐ろしさをリアリティを持って想像できるようになったと思います。

「皆さんに少しでも
前向きな気持ちに」

熊野町が災害FM「くまのちょうさいがiefem」を立ち上げたと聞いて、何かあったらお手伝いしますと伝えていました。そして、8月26日の特別番組にメビウスのお二人と一緒に出演させていただきました。皆さんに少しでも明るく前向きな気持ちになっていただけるようトークしました。これが縁で、災

「みんなが「想い」を一つにして、
よりよいまちにできたら」

害FMのアナウンサーの方に私が担当するHFMの番組に出させていただきました。県内他市町のリスナーにも、災害FMの役割や災害への向きあい方をお伝えすることができたと思います。

「故郷をもっと好きに
なって欲しい」

災害が起こってしまったがゆえに、熊野を安心安全なまちにしていこうという町民の皆さんの意識は高まってきていると思います。災害をきっかけに自分の住むまちに関心を持つようになった若い世代も多いのではないのでしょうか。そんな方たちに熊野のことをもっと好きになってもらいたいし、町内の人も私のように町外にいる人も、熊野に関わっている人たちが想いを一つにし、よりまちづくりを進めることができたらと願っています。

歌を通して被災した人たちに元気を与える活動を続け、熊野第四小学校の子どもたちと一緒に復興応援ソング「フレフレのうた」をつくったメビウスのお二人。復興への思いを空を舞う風船に託した「赤い風船」も歌われています。

復興への思い



シンガー

Mebius

メビウス 岡田真実さん(左:Mami) 岡田賀江さん(右:Norie)

「音楽を歌い続ける決意」

発災の翌日、町民体育館が大変なことになっていると聞き、Tシャツやタオルなどをかき集めて向かいました。それから、炊き出しのお手伝いをしたり、母の営む飲食店で朝食を作って届けたりと、ボランティア活動を始めたんです。最初は被災された方にどう声をかけていいのか分からずにいましたが、8月に体育館の駐車場で開かれた縁日で歌う機会をいただきました。今自分たちの音楽が本当に必要なのかと自問しつつステージに立ったのですが、ライブの後にあるお父さんが「家族を支えるために気を張ってきたけれど、歌を聴いて楽になった」と泣きながら言われ、「傷ついた心に少しでも元気を与えてあげられるものなら、これからもずっと音楽を続けていきたい」と思いを新たにすることができました。

「傷ついた心に、音楽の力で、少しでも元気を与えたい」

「一番辛く、心に残ったライブ」

復興応援ソングを歌うのは辛いのではないかと思い、最初は大原ハイツの子どもたちには声をかけずにいました。けれども、体育館の館長に励ましていただき、自分たちも大変な思いをしているのに、みんなに前を向いて歩きだして欲しいという思いで、手を挙げてくれた熊野第四小学校の子どもたちに「フレフレの歌」のレコーディングに参加してもらうことにしたのです。豪雨災害から1年後の追悼式で子どもたちと一緒に歌ったのですが、遺影を持って泣いている人もいました。子どもたちもみんなに元気を与えようと思って歌っているのに、涙を流している人たちがいるのを見て、こらえきれずに泣き出してしまったんです。私たちも今まで歌った中で一番辛い経験でしたが、心に残るライブになりました。

苦しんでいる方の心に届くことが、私たちの音楽活動の糧になります。これからもライブや曲づくりに頑張り、私たちが育ててくれたあたたかい熊野町に恩返しができたらと思います。

災害復旧中箇所 (令和3年(2021)2月時点)



三谷川の砂防ダム(初神地区)



初神地区を流れる三谷川の上流部で土石流が発生しました。緊急事業としての堰堤工の工事は令和3年7月の完成を予定しています。その後、再度災害防止に向けた激特事業として2基目の堰堤整備を進めていきます。

熊野川支川の砂防ダム(新宮地区)



新宮地区を流れる熊野川の支川で土石流が発生しました。緊急事業としての堰堤工の工事は令和3年中の完成に向けて引き続き工事を進めます。

平成30年7月豪雨災害からの復旧状況

現在、平成30年7月豪雨によって町内で被災した山林、河川、農地等の災害復旧工事が進められています。町内には多くの土砂災害が発生しており、緊急性の高いものから順次対応しています。

大原ハイツ(川角地区)

被害の大きかった川角地区の大原ハイツでは、被災直後から、団地内の道路や宅地内の土砂撤去、並びに避難用の大原ハイツ避難路を整備しました。さらに今後の雨に備えるために、大原ハイツ内に雨量計を設置しています。雨量情報は、PC・スマートフォンで確認することができます。

土砂災害に対しては、広島県が緊急事業として砂防堰堤の整備を令和元年12月に完成させました。引き続き災害防止のため激特事業として、堰堤の整備を完成させ、溪流保全工の整備も進めています。



工事完了(令和元年12月18日)



工事完了(令和元年12月3日)

町道井手ヶ原線の慶神橋(出来庭地区)



出来庭地区を流れる椎川に架かる慶神橋は、土石流により橋脚が損傷を受けて通行止めとなりました。復旧では河川内の橋脚を無くし、災害の防止を図ります。(復旧工事は令和3年3月に完成)

二河川のがけ崩れ(神田地区)



二河川の右岸側の住宅地に隣接した林地のがけ崩れが発生しました。(復旧工事は令和3年3月に完成)

災害復旧完了箇所 令和2年(2020)11月時点

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



普通河川鞘ノ河内川(新宮地区) 水勢により、川底が掘り起こされ、崩壊した護岸と川底の復旧工事を行いました。(令和2年8月工事完了)

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



町道大坪線外1路線(新宮地区) 熊野川の氾濫により崩壊した護岸と、それに伴い流失した道路について、合わせて復旧工事を行いました。(令和2年9月工事完了)

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



町道沖田川端線(初神地区) 三谷川の氾濫で大きな被害が発生した護岸と道路の復旧工事を行いました。(平成31年3月工事完了)

平成30年7月豪雨災害からの復旧状況

平成30年7月豪雨災害から復旧工事が行われ、町内の多くの場所で復興が進んでいます。

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



普通河川滑羅川(出来庭地区) ▶ 普段は水量の少ない小河川でも護岸の崩壊が発生したことから、復旧工事を行いました。(平成31年12月工事完了)

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



町道呉地奥2号線(呉地区) ▶ 二河川の氾濫により、道路路面が流失したことから、復旧工事を実施しました。(平成31年2月工事完了)

被災状況



復旧状況 令和2年(2020)11月24日時点



大原ハイツ(川角地区) ▶ 平成30年7月6日にがけ崩れが発生していた箇所は、広島県が工事を施行しました。(令和元年11月工事完了)

熊野中学校 5名

熊中三年 嘉本結衣

自由
う何が起るのか
分らないから
今この時を
思いましょ
楽しもう

熊中二年 小留杏莉

前進
この先どんなことが
あっても

熊中一年 森鳥 愛

橋
にせう

今と昔をつなげる

熊中一年 井原紗菜

紡ぼう

悲しい気持ちだが
少なからず未来を

熊中一年 女夫池 香乃

人生
明日何が起るか
分からなからう
感謝の気持ちを
忘れず
毎日を
大切にしよう

熊野東中学校 12名

熊東中三年 森山沙也香

支え
合おう

熊東中二年 福垣内七海

明日は
晴れ

熊東中二年 田中みな白

希望
の光

熊東中二年 中原夢加

共助

熊東中一年 竹田 凛々愛

笑顔

熊東中一年 三輪 大翔

想心

熊東中一年 渡邊 晃汰

底力

熊東中一年 山本 京住

思い
やりい

熊東中一年 中野 紅菜

輝く
未来

熊東中一年 菊池 陽菜乃

信頼

熊東中一年 菊池 陽菜乃

経験

熊東中一年 溝上 晴太

援助

熊野高等学校 16名

未来への

熊野高一 種子田 青杜

友愛

熊野高一 山崎 日向

翔

熊野高一 岡本 奈々

開花

熊野高一 小島 有紗

日新

熊野高一 田村 有莉咲

笑顔の輪

熊野高一 中園 明日花

想像

熊野高二 藤原 悠

協調

熊野高二 藤原 悠希

共助

熊野高二 渡辺 優希

花笑

熊野高二 屋敷 悠

進化

熊野高三 井上 瑠依也

温心かな

熊野高三 榎本 颯太

継承

熊野高三 金沖 紀果

誇伝ある

熊野高三 田村 美奈花

新汗 筆の里

熊野高三 森島 綾菜

前進

熊野高三 古村 珠春

希望

熊野中学校・熊野東中学校・熊野高等学校の書道部のみなさんに「未来へのメッセージ」というテーマで想いを込めて一筆書いていただきました。

表紙題字：広島県立熊野高等学校 3年1組 田村 真奈花

熊野町平成30年7月

豪雨被災誌

あの日、あの時、熊野で見たもの。

【発行日】 令和3年(2021)3月

【発行元】 熊野町役場

【編集】 熊野町住民生活部防災安全課

〒731-4292 広島県安芸郡熊野町中溝一丁目1番1号

TEL 082-820-5631

【制作・印刷】 ㈱ぎょうせい



筆の都～心の風に筆が舞う～

熊野町